

第3章 天草における中世の交流

——天草の遺跡出土貿易陶磁から——

中山 圭

はじめに

遺跡を発掘することで出土するやきものにはさまざまな種類がある。土器、須恵器、陶器、磁器など成形素材や焼成法により種別が異なり、また、それぞれの特性に応じて食膳具、調理具、貯蔵具、運搬具、祭具など用途に沿った形状で焼成された。過去の人々の生活の中で利用され、そして廃棄されたやきものは、不朽の遺物として現代の発掘調査によって見出され、遺跡の時代や性格を決定付ける重要な資料となる。

これら多種にわたるやきものの中で、中世日本では生産技術が確立できなかったものとして磁器が挙げられる。素地の材料として粘土ではなく、陶石を破碎したものを使用する磁器は、江戸時代初期になって初めて国内での生産が開始された。湯呑やご飯茶碗として今日の生活においては遍く普及しており、また天草はその原料となる陶石の供給地として国内第一を誇るが、それでも戦国時代まではその全てを海外からの輸入に依存していた。

城館や集落などの中世遺跡を発掘すると少なからず青磁や青花（染付）などの磁器が出土する。これらは全て海を越えて招来されたものであり、そのほとんどが中国で生産されたものであった。つまり、この磁器が出土する遺跡では直接間接になんらかの形で中国との関わりがあったと換言できる。無論、これら中国産磁器は膨大な量が舶来しており、国内の中世遺跡では、中国産磁器を出土しない遺跡の方がむしろ少ないくらい、全国各地に流通していた。このため、陶磁器の出土をもって、直接的に交易に関連していると断言できる遺跡はあまりないが、その出土量や器種の多寡等から列島内で地域レベルの特徴と格差が確認できる。このため輸入磁器の出土傾向を検討する研究は、中世における対外交渉の実態解明の一端を担っているといえよう。考古学的には磁器のみならず陶器も含め、舶来したやきもの全般を「貿易陶磁」と呼称し、出土遺跡の時期判定の物差しとして、またモノが流通したプロセスを解明する材料のひとつとして、研究が進んでいる。貿易陶磁は、個別遺跡の時期判定や意義付けのみならず、列島における地域的な分布状況等のマクロな視点、あるいは文献資料との照合等の学際的視点から複合的に活用できれば、文化交流の在り様を論じる上でも有用な資料となりうるものである。

九州西岸の中部に位置する天草諸島は、古来より海と共生する文化を営んできた。東シナ海を横断し、直接中国大陸へ渡航することができるその地理的環境から、中世遺跡では貿易陶磁が特徴的に出土している。発掘調査がさほど進んでいない天草では、決して多量に出土しているとはいいがたいが、各遺跡において出土した多岐にわたる遺物の中であって、総じて貿易陶磁は占める割合が多い状況にあり、大

きな特徴をなしている。本稿ではこれまでに天草地域の遺跡から出土した陶磁器を提示し、出土傾向を検討、また文献資料による記録と突き合せて中世天草の対外交流の実情に迫ってみたい。

1 天草の位置と環境

大小120ほどの島で構成される天草諸島の中で、特に大矢野島、天草上島、天草下島の3島が面積的に大きく、経済的にも主体をなしている。周辺海は、北側に有明海、東南側に八代海と九州を代表する内海が広がり、一方で西側は外洋である東シナ海に面し、海を隔てて中国大陸とも隣接する位置関係にある。

各島の海岸線は、内海と接する地域及び外海と接する地域により趣が異なるため、複雑な海岸線とな

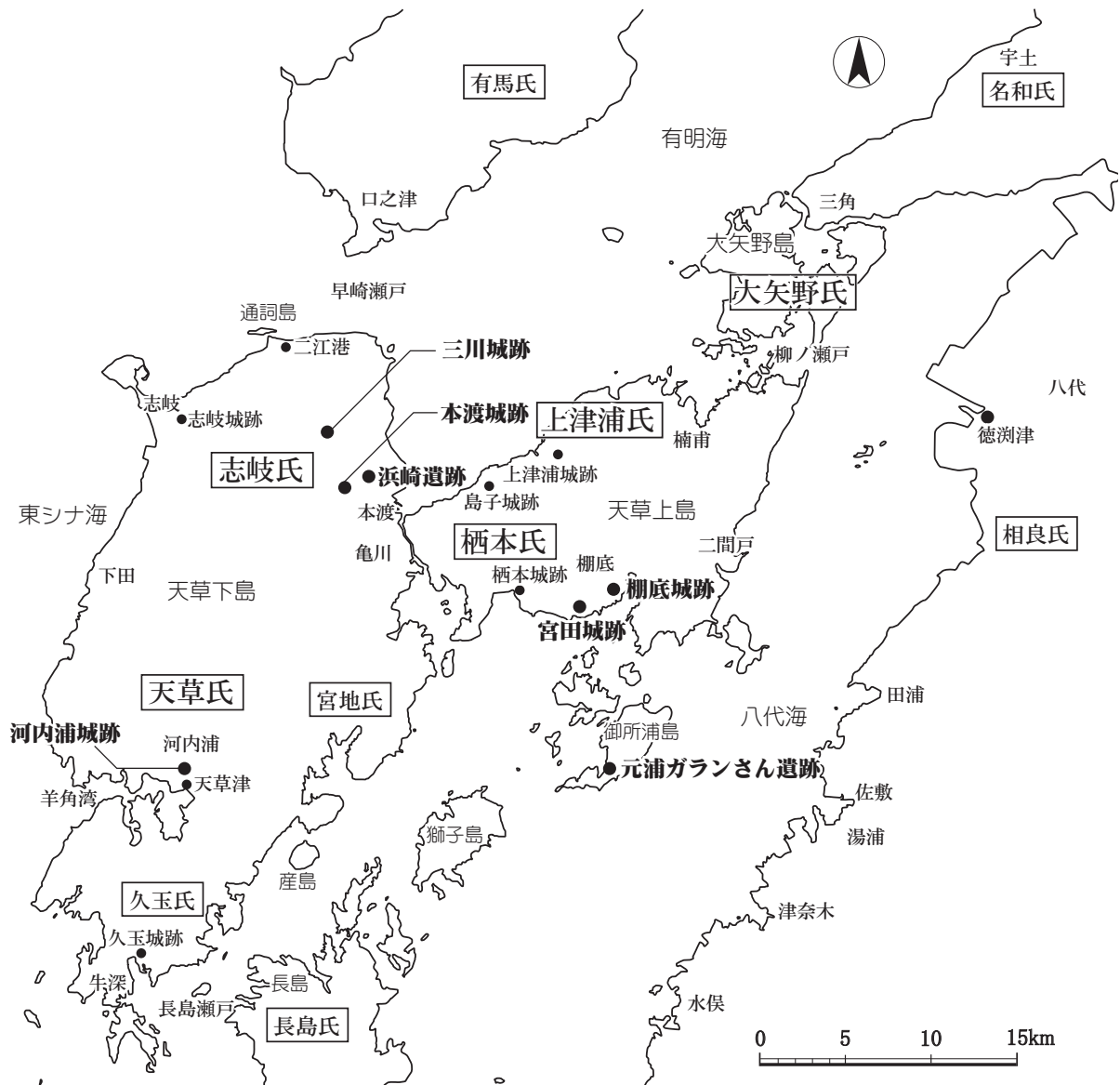


fig 1 天草の貿易陶磁出土遺跡分布図

っている。天草下島の西海岸のように東シナ海の荒い波濤により岩盤が侵食され、断崖絶壁が続くラインもあれば、穏やかな内海である有明海に面する上島北海岸や不知火海に面する上島南海岸などは比較的緩やかなカーブの遠浅の海岸線が続く。

地形的には丘陵が海岸線付近まで迫るため、平地が極めて少ない。江戸時代中期以降盛んに行われた干拓によって、現代でこそ多少の平野が見られるが、中世以前にはまとまった規模の平野はさほど多くなかったであろう。限られた平野部に古くから営まれた集落が、今日、各地の市街地の基礎になっている。

天草では、縄文時代より海と共生する歴史をつづってきた。縄文時代の代表的な遺跡である沖ノ原遺跡や大矢遺跡、一尾貝塚などは遺跡の立地が海沿いにあり、石銛や結合式釣針など多種多様な漁撈具が出土する。天草の生活が、有史以前から、海の資源によって成り立っていたことを教えてくれる存在である。時代がくだって、古墳や中世の城郭に至ってもまた、主要なものほとんどが海に面した丘陵上に形成されて、代々の為政者は海を強く意識した領地支配を行っていたと考えられる。

2 中世天草の政治的状況

中世の天草は、各島に地頭職として補任され入島した豪族がそのまま在地領主となり、抗争と融和を繰り返しながら戦国末期まで至っている。各領主とも多少の版図変化や消長はあるが、基本的には全島を掌握するだけの統一権力が発生しなかったことが特徴である。しかし、天草の諸領主は、15世紀末から16世紀頃には「天草一揆中」として国人一揆を結成し、領主連合的性格を有していたことが判明している。肥前松浦党に見られるような正式な一揆契諾書の存在が知られていないため、どの次元までの紐帯であったかは不明ながら、島外勢力への自衛的な意味合いでの連合とみなせる。天草一揆中は菊池、相良、大友、島津等九州本土の守護級勢力の傘下に自ら進んで入ることで、島外からの武力渡海を未然に防いでいたようである。突出した軍事力を持たない島の国人領主なりの処世術であった。

天草一揆中は16世紀中頃までにいくつかの領主が淘汰され、島々の領主は志岐、天草、栖本、河内浦、大矢野の五家となった。この五家を特に「天草五人衆」と呼びならわすことが多い。天草五人衆は永禄9年（1566）以降、個々にではあるが、領民とともにキリシタンに改宗し、16世紀末の全島キリシタン化の原動力となった。

天草五人衆において、初めて史料にあらわれるのが志岐氏である。「志岐文書」によれば菊池一族であった藤原光弘が元久2年（1205）に佐伊津澤張、鬼池、蒲牟田、大浦、須志浦、志木浦の6ヶ浦の地頭に補任されている。この浦々は現在の天草郡荅北町から天草市有明町にかけての有明海沿岸地域である。本拠は天草下島北西部の志岐に置き、天草下島北部を勢力範囲とした。天草上島有明海岸の大浦、須志浦などは後に興ったと思われる上津浦氏の所領となっていくと見られるが、天草上島の橋頭堡として島子の一部を保有していたことが知られる。志岐氏領地である天草下島北岸と対岸の島原半島に挟まれて形成される早崎海峡は、東シナ海から有明海へ入るための鶏口で、海上交通の上で極めて重要な水道であった。志岐氏は常時この海峡を掌握し、大きな権益を得ていたと推察される。

貞永2年（1233）の「天草種有讓状案」に天草種有が本砥嶋の地頭職にあり、その領地を庶子に分割

して相続させる旨が記されており、「河内浦」「大江」「高浜」「産島」などの地名が見られる。この通り天草氏は現在の本渡から河浦、大江あたりまで天草下島中南部一帯を領していたことがわかる。14世紀頃には本拠地を本渡から、東シナ海より湾入する羊角湾の最深部である河内浦に移している。本渡方面では志岐氏と領地の争奪を繰り返しているが、本拠の河内浦周辺は奥まった地域であり、西南部の支配は安定していたと見られる。安定した統治環境からか、天草五人衆の中で最大の力を誇り、16世紀半ばには牛深、長島、獅子島、下砥岐島（現在の御所浦町）まで勢力を伸張した。早くからキリシタンの庇護に注力し、天草におけるキリスト教の浸透は実質的に天草氏によって牽引された。河内浦付近にはポルトガル船の往来もあり、天草における海外交流の最先端をなした。

弘安4年（1274年）の弘安の役において活躍したのが大矢野種保・種村兄弟である。蒙古襲来絵詞には、竹崎季長などと共に活躍する大矢野氏の雄姿が描かれているが、現存する襲来絵詞は大矢野氏の子孫が献上したと伝わっている。

大矢野氏はその姓の通り、大矢野島を中心に勢力を持ち、戦国期には天草上島東海岸で八代海に面する二間戸や有明海沿岸の楠浦あたりまでを領していたと考えられている。

元徳元年（1329）には鎮西探題から「上津浦次郎太郎入道」に当たった文書が残っており、上津浦氏の存在が明らかとなる。上津浦氏は天草上島の有明海側にあたる上津浦を本拠地としているが、二間戸に隣接する神代や高戸など天草上島の八代海側地域まで勢力圏を伸ばしていたと考えられる。

続く永和4年（1378）付の「吉川文書」によれば、今川了俊が熊本の本拠地を攻めた折に天草各領主が戦いに加わっており、大矢野氏・上津浦氏と並んで、栖本氏の記載が見られる。栖本氏は天草上島の南側を中心に治め、北と東に隣接する上津浦氏とは幾たびも境目争いを繰り返している。天草島内での勢力争いは、領主同士の同盟と対立が、時々によって目まぐるしく変化し、非常に複雑な様相を示しているが、その中で栖本氏と上津浦氏は一貫して対立の姿勢を崩しておらず、戦国期天草の政治状況における基本構図になっている。

この吉川文書には、天草下島南端を領する久玉氏も名前を連ねている。久玉城を本拠として現在の牛深を支配していた久玉氏は、天草一揆中に加わる代表的な領主であったが、16世紀代に天草氏に糾合されたと見られ、天草五人衆としては数えられていない。

現在は、鹿児島県に属する長島に居を構えた長島氏も同様に天草一揆中の一氏に数えられていたが、16世紀半ばに没落した。長島氏没落以前は、天草の一部として肥後国に属した長島は、その後、島津氏領となったため、現在も鹿児島県域になっている。

13～14世紀にかけて歴史上に顕在化した天草の領主たちは、16世紀頃には国人一揆を組織、天草一揆中として対外勢力の動静を見極めながら、盟主を選択しつつ、且つ島内では覇権を競いあった。そして、天草五人衆となった後は戦国領主としての終幕を各々がキリシタン領主となって迎え、波瀾に満ちた歴史をつづっている。決して肥沃とはいえない島で、数多の兵を動かすこともできない国人領主でありながら、下克上の時代を全うしえたのは、周囲に広がる海がもたらした独立性と権益が大きかったと考えられよう。

以下、主に天草五人衆に係わる遺跡から出土する貿易陶磁について検討していきたい。

3 天草における陶磁器出土遺跡

発掘調査の回数が僅少に過ぎない天草地域では、全島的な貿易陶磁の出土状況は把握できていないの実情である。しかしながら、天草五人衆に係わる中世城跡のいくつかは、町史編纂事業などによって発掘調査が行われており、各遺跡で貿易陶磁が出土している。これらの調査はほとんどが確認調査レベルの狭小な発掘調査にとどまっているが、その調査面積の割には、希少品とみなせるものが出土している。現在までの状況は、その本来の様相からすれば、ごく一部を示しているに過ぎないと考えられるが、それでも、海を隔て中国との直接往来が可能であった天草の地理的特性を想起させるような資料が散見されるので、遺跡ごとに見ていきたい。

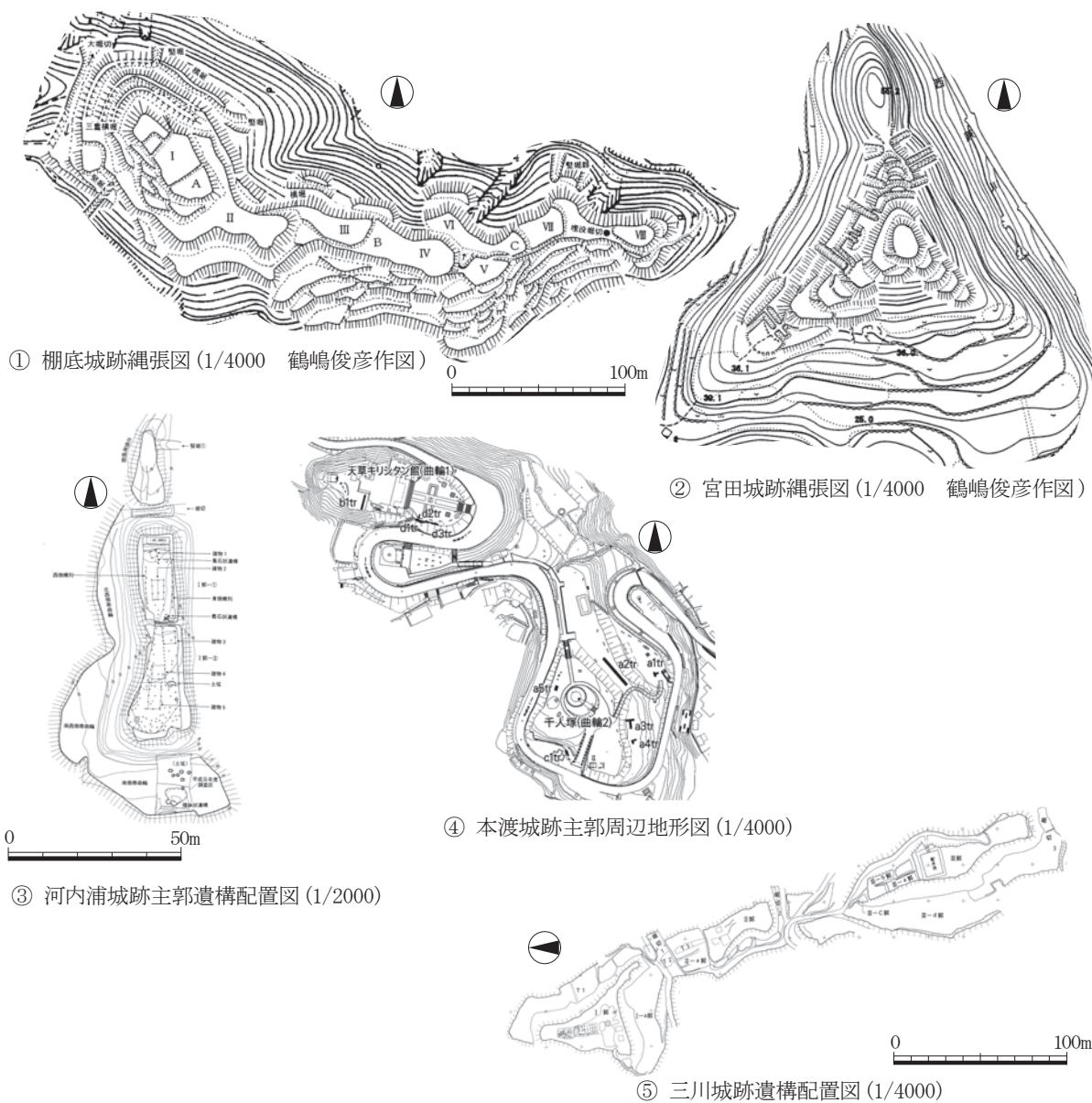


fig 2 城郭縄張図・地形図

なお、中世前期が中心となる浜崎遺跡を除き、他は中世後期の城館が主流である。中世の貿易陶磁は、青磁・白磁・青花を中心に器形や文様のパターンによって分類と編年が進んでおり、個別のタイプを代表的な編年を提示した研究者が定めた分類記号によって示すことが多い。本稿では、原則として浜崎遺跡出土分は大宰府編年〔太宰府市2000〕を、他の遺跡については、青花磁器の分析を中心に画期毎の青磁や白磁とのセット関係を明らかにした小野正敏の編年〔小野1982・1985〕に従って出土陶磁の分類を提示することとする。

(1) 浜崎遺跡（天草市北浜町、城下町）(fig 3)

天草市の中心街をなす本渡地域の北地区に所在する中世遺跡である。現在、閑静な住宅街となっている本渡北地区は、平成2～3年に区画整理事業が実施され、その際に浜崎遺跡が発掘調査された。11～13世紀にかけての中世遺跡で、遺構としては掘立柱建物跡や溝状遺構などが検出されており、遺物はさまざまな種類のものが大量に出土した。貿易陶磁や土師器の他に東播系須恵器・滑石製石鍋などの国内流通品、韃の羽口・鉄滓などの鍛冶関係遺物、宝篋印塔・五輪塔などの石塔も出土しており、鎌倉時代の活気溢れる町の姿が脳裏に浮かぶ。中世前期の遺跡としては、熊本県内を代表する遺跡と考えられよう。

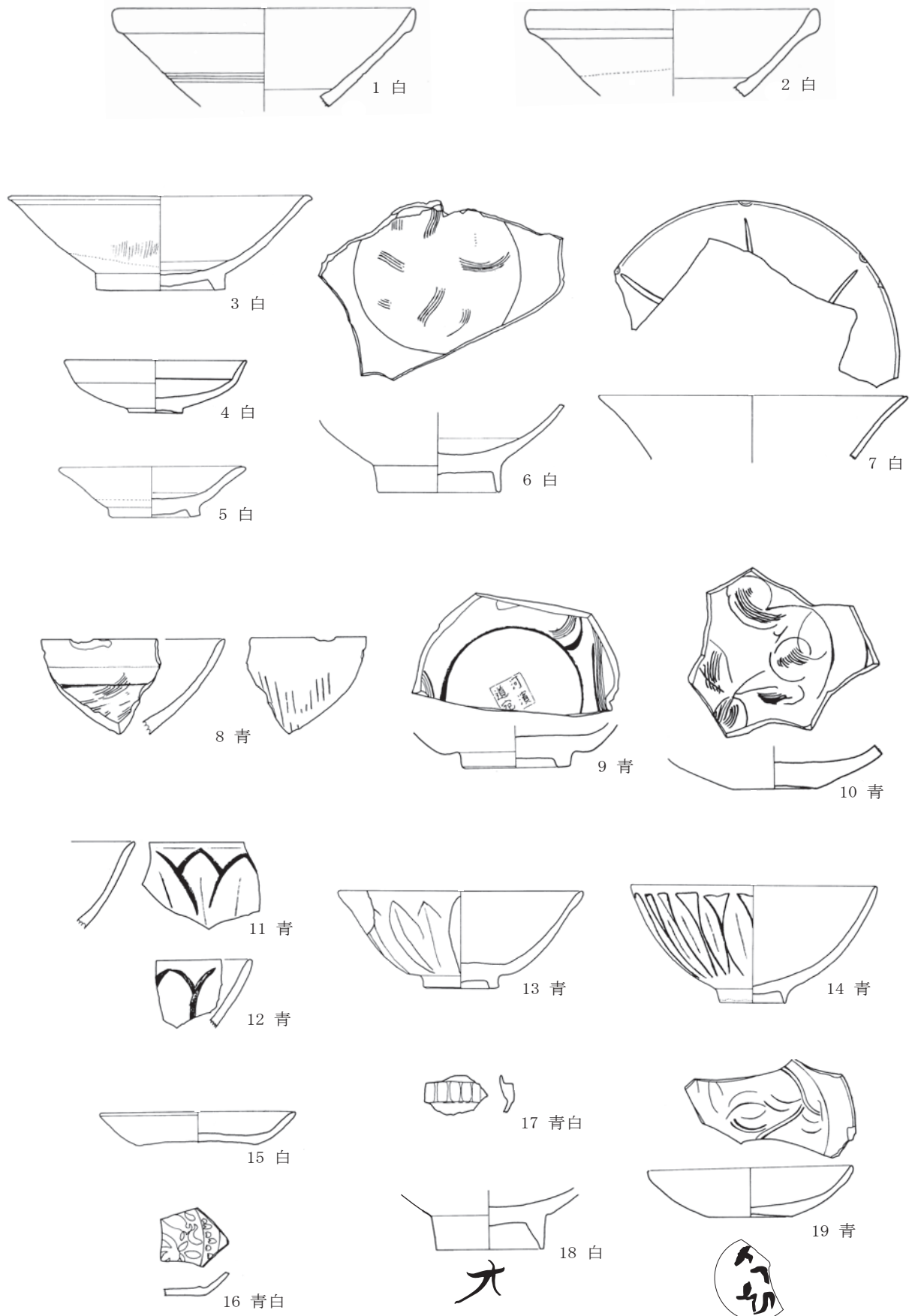
貿易陶磁類は白磁碗Ⅳ類（1、2）、白磁碗Ⅴ類（6）、白磁皿Ⅵ類（4）などの福建系白磁と同安窯系青磁碗Ⅰ類（8）、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（9、11～14）などが主流で、わずかに景德鎮系口禿皿Ⅸ類（15）、景德鎮系青白磁皿Ⅹ類（16）なども見られる。しかしそれ以降の遺物はほとんど見られなくなる。遺跡の立地からすれば、すぐ西方に隣接する丘陵部には戦国後期に天草氏第2の城として利用される本渡城があるにも係わらず、14世紀以降の遺物が見られない点はやや腑に落ちないところであるが、集落の移転に起因する可能性が強い。

先に述べたように、13世紀前半には既に天草氏が地頭として本渡一帯を統治しているのが明らかで、貿易陶磁の量から浜崎遺跡は地域の有力者である天草氏と関連する遺跡である可能性はすこぶる高い。その浜崎遺跡が14世紀頃に途絶する理由としては、天草氏の河内浦への本拠地西遷が想定されよう。志岐文書「一色道猷書下」には、建武4年（1337）に本渡・亀川の地頭職を志岐高弘に与えようとした際に、河内浦三郎入道が城郭を構え抵抗したことが記されている。この点から14世紀前半には本渡の地頭職は志岐氏のものとなり、天草氏は本拠を河内浦へ移して河内浦姓を称していたことが判明している。浜崎遺跡の衰微は、天草氏の本拠移転と連動していると見ることができ、その交易活動も外海に面した河内浦へと機能が移ったと考えられよう。

浜崎遺跡出土の貿易陶磁は出土点数が多く、当地での活発な交易の証拠を示しているものの、所有者のステータスを表象する「威信財」と呼ばれるような陶磁器はあまり見られないため、浜崎遺跡が天草氏の居館であった可能性については、今後検討を要する。

日常的な碗皿の中で、注目される資料として墨書陶磁器がある（18、19）。図示したものを含め現在のところ、5点ほどの出土が確認されているが、「大」銘を持つ18を除き文字が判読できていない。18は白磁Ⅴ類碗、19は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類である。墨書陶磁器は、国内出土例のほとんどが福岡市の博多遺跡からの出土で、中世最大の貿易都市を特徴付ける遺物である。特定の綱首（宋人貿易組織）を示す「張

第3章 天草における中世の交流（中山）



青=青磁, 白=白磁, 花=青花
 青白=青白磁, 彩=五彩, 天=天目



fig 3 浜崎遺跡出土貿易陶磁（1/3）

綱」などの銘から、多くは陶磁器の帰属先を識別するための記号と見られる〔大庭2008〕。

大量に出土する博多遺跡を除いては、大宰府や佐賀平野などからわずかに出土するに過ぎず、長崎県域ですら3点しか出土していない。その点からすれば、浜崎遺跡での5点出土は、むしろ博多・大宰府以外の単一遺跡としては数量的に多い部類であろう。圧倒的な博多遺跡とそれ以外の遺跡での出土は、港市（国際貿易都市）と寄港地としての遺跡の性格の差異と評価されている〔宮崎1996〕。浜崎遺跡もそのような位置づけとして、日宋貿易における寄港地としての可能性を持っている。墨書陶磁器は、浜崎遺跡近辺で商取引に携わった中国人の存在をうかがわせる貴重な資料である。

（2）棚底城跡（天草市倉岳町棚底）（fig 4・5）

棚底城跡は天草上島の南部、八代海に面した城郭で、天草諸島で最も高い山「倉岳」（標高682m）から派生する尾根筋上に築かれている。

中世天草に関する文献を列記した tab 1 のNo.6 に示した『八代日記』に残る「天文十三年、上津浦親類中下城」という記録から、天文13年（1544）以前は上津浦氏の一族衆が在番する支城であったが、海上交通の要衝であったため、その後、上津浦氏と栖本氏による争奪の舞台となった（No.34、No.37、No.40など）。天草五人衆の本城ではないが、小型城郭の卓越する天草地域の中世城館にあって、珍しく規模が大きな城郭であり、尾根筋上に連なる8郭の曲輪から成り立つ。最高所で主郭を成す1郭では、多数の岩盤掘り込み柱穴と共に貿易陶磁片が多数出土した。その周囲に横掘と土塁を三重という嚴重さで設けるほど、1郭の求心性の高さが遺構からも際立っており、尾根筋上の城郭でありながら居館機能を兼ねた城郭として評価されている。1郭を中心とした各曲輪の発掘調査により、1000㎡程度の調査面積で2033点に及ぶ遺物が出土し、貿易陶磁はそのうちの実に56%という高いパーセンテージを占める結果が得られている〔天草市2009〕。

図示した遺物のうち、20～56は1郭、57～67は2郭、68～79は4郭、80・81は8郭から出土している。青磁は簡略化された蓮弁文を持つ青磁C群碗（28、74）が最も多いが、雷文帯（23～26）を持つB群碗、端反タイプの碗（21、22）なども見られ、15世紀以降の青磁が満遍なく出土している。

15世紀後半から貿易陶磁の主流となる青花は、見込が凹む青花C群碗（31、65）と碁笥底の青花C群皿（33、80）が最も多く、次いで端反口縁を持つ青花B1群皿（34、35）も多く見られる。

白磁についても、青花B1群皿と同型の白磁C群皿（30、61）が非常に多い。白磁C群皿の前代に位置づけられる白磁B群皿（29、72、73）は寡少で、C群の次代に当たる白磁D群の菊型皿もまた数点の細片が見られるのみである。遺物の全体の年代は、14世紀末から16世紀中頃までの範疇に位置づけられ、ピークは青磁C群、青花C群、白磁C群の15世紀後半～16世紀前半となる。

棚底城跡から出土した資料のうち、まず注目されるものとして、4郭より出土したベトナム製青花碗の口縁破片（68）が挙げられる。口縁が外反する小型の青花碗であり、ベージュの釉下に流れるような筆致の唐草文をコバルトで描くのが特徴である。14世紀後半～15世紀中葉に位置づけられる資料で、棚底城でも比較的初期に位置づけられる遺物といえよう。この時期のベトナム陶磁器は、福岡県の博多遺跡や大宰府、長崎県対馬市の水崎遺跡、同壱岐市の観城跡などである程度の数が出土している。前2者は中世を代表する交易都市であり、後2者は倭寇との関係が深い遺跡と言われる。その他、唐津・伊万

第3章 天草における中世の交流（中山）

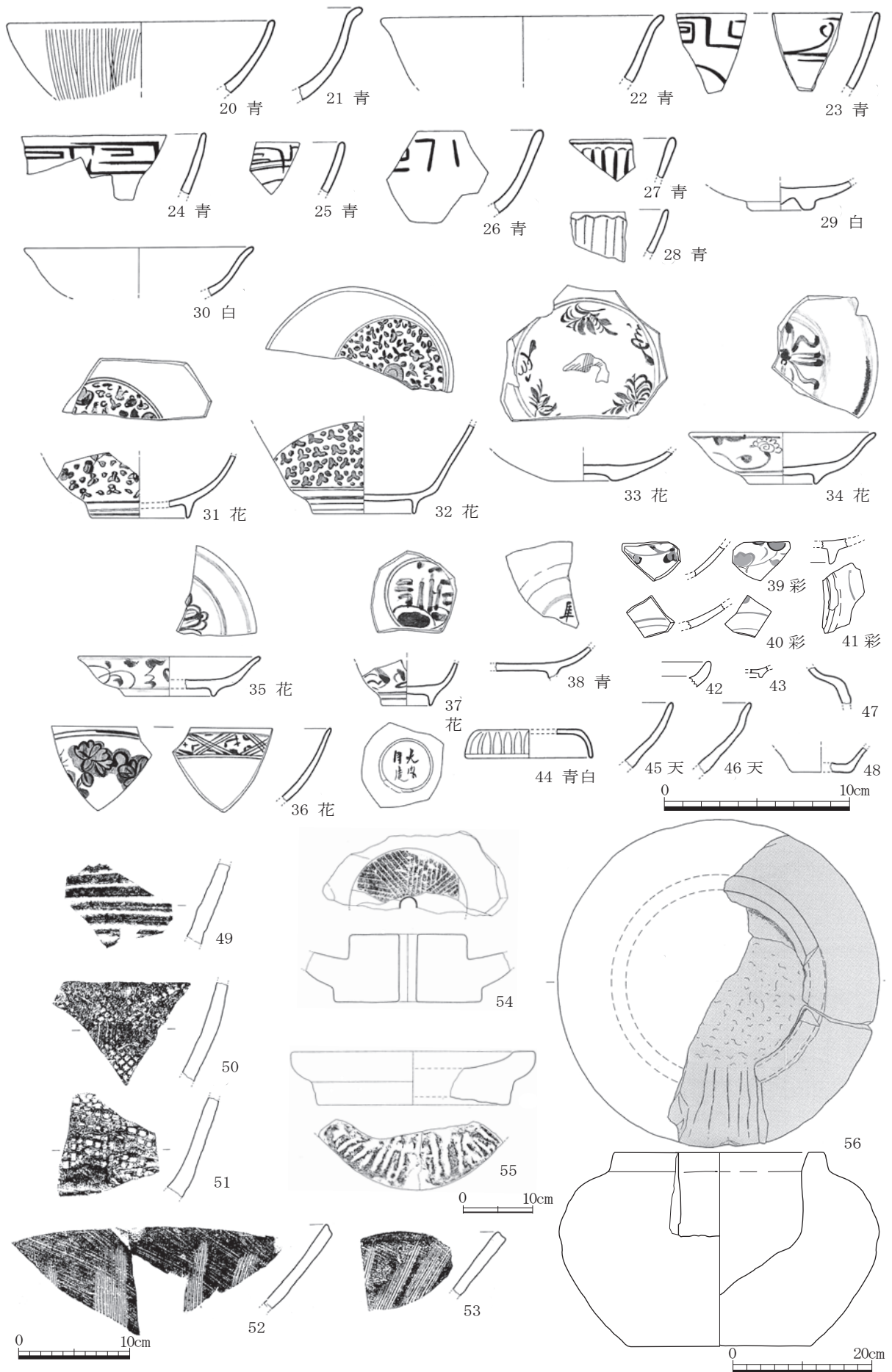


fig 4 棚底城跡出土貿易陶磁① (20~48 : 1/3, 49~53 : 1/5, 54~56 : 1/8)



fig 5 棚底城跡出土貿易陶磁② (57~80 : 1/3, 81 : 1/5)

fig 6 元浦ガランさん遺跡出土貿易陶磁 (1/3)

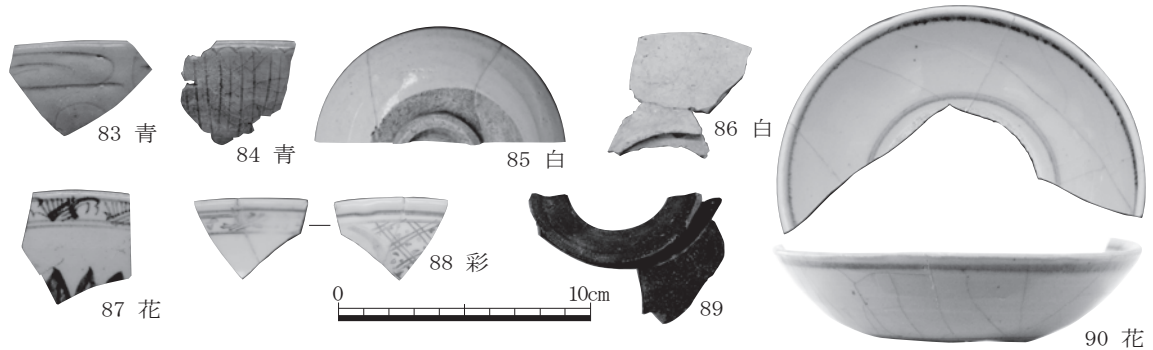


fig 7 宮田城跡出土貿易陶磁 (1/5)

里・平戸など九州北西部の遺跡を中心に交易と係わりのある遺跡での出土が見られている〔森本2000〕。

38は景德鎮系の青磁であるが、高台内のみ白磁となるいわゆる「裏白」の皿である。高台に「年」の字款が見られることから、「大明年造」「天文年造」などの銘があったと考えられる。体部は欠損しているが、輪花型の器型であったと考えられ「倭好」製品の一つである。日本の年号である「天文」銘を入れた陶磁器は、明側の『日本一鑑』において「中国人ブローカーが渡来してきた日本人から資金を得て景德鎮に行き、陶磁器を購入し、その底に日本の年号を入れて暴利を得ている」と述べられている〔神戸2000b〕。後述する天文年間の八代海と中国の盛んな往来と関連付けられる資料である。

39～41は景德鎮系五彩皿片で、この3点は同一個体であると見られる。42は華南三彩の緑釉盤の口縁細片、43は瑠璃釉紅皿の極細片。喫茶道具としては、天目碗（45、46）、茶入（47、48）があり、いずれも中国産と見られる。石製品の茶道具として茶臼（54、55）、天草産の砂岩で作られた風炉（56）がある。風炉は通常は瓦質土器で作られることが多いが、石で生産されている点に石材の豊富な天草らしさが表れている。さらに、70は一般的な龍泉窯青磁ながら、見込に無数の茶筌傷が残る。青磁も喫茶用の器として利用していたことがわかり興味深い。これらの一連の資料は列島縁辺の喫茶具の組み合わせを提示している点で注目される。

49は焼き締められた長胴甕の破片で、産地不明。中国産か東南アジア産のものと推定している。このような産地不明の陶器がいくつか出土している。79は灰色磁器皿の底部破片で、ヒビ焼とも呼ばれるものである。青花E群皿と対応する内湾器型となるものと推測され、豊後府内などに類例が見られる〔大分市歴史資料館2003〕。大型の製品は69の龍泉窯系稜花盤が見られる程度で、日常の碗皿がほとんどながら、その中で非常にバリエーションに富むことが棚底城跡出土品の特徴である。

（3）元浦ガランさん遺跡（天草市御所浦町元浦）（fig 6）

八代海に浮かぶ離島、御所浦島南部に残る遺跡。楕円形の入り江に営まれている元浦集落に遺跡があり、「ガランさん」という地名から中世寺院があったものと考えられる。

いつ頃かは不明ながら元浦集落の家屋建築に伴って実施された造成で、完形の景德鎮系白磁C群皿（82）が10枚セットで出土している〔御所浦町1981〕。この景德鎮窯で生産され、薄作りで口縁部が外反する特徴を持つ白磁C群皿は15世紀後半～16世紀中頃に輸入され、戦国期中世遺跡で最も通有に出土する貿易陶磁であるが、言及すべき価値は同一形式の器が10枚組で出土したその出土状況にある。寺院における地鎮的埋納か、あるいは貴重品の隠匿的な埋納か、発掘調査が行われたわけではないため、詳細な出土状況がわからず、その性格は不分明であるが、博多遺跡第124次調査の埋納遺構〔福岡市2004〕あるいは愛媛県の見近島城跡での出土例〔愛媛県1983〕から、概ね景德鎮系磁器皿は10枚が一単位として搬入されていたと見られる。このように同一タイプの陶磁器が10枚前後、まとまった数で出土する状況を柴田圭子は「大量流通・大量消費に耐えうる形として、海外の出荷元から一定の荷の単位が直接運び込まれた一次的搬入」と捉えており〔柴田2000〕、ガランさん遺跡の例もこれらと同様の状況を示すと考えられよう。

御所浦の島々は中世当時「下砥岐」と呼ばれ、八代海の海上交通の要衝であったと考えられる。tab 1 No42に示したとおり、文献上では天草氏が進出し永禄7年までその勢力下にあり、以後は上津浦氏の所

有となる。

複雑な入り江をいくつも擁する御所浦の島々は、一見して海賊活動に適した地勢と理解される。西方には、現在は鹿児島県となっているが、永禄年間まで天草に属した獅子島・長島が連なり、天草諸島でも最も小島が群集する地域の一つであった。後に詳しく触れるが、中世八代海は船舶往来が頻繁で、御所浦島は相良氏の国際貿易港「徳測津」と直接連絡できる要路にある。東シナ海に權益を持つ天草氏、有明海に權益を持つ上津浦氏がそれぞれ、一次的であれ、抑えていたことから、八代海の制海権を掌握するためには不可欠な存在であったことは想像に難くない。御所浦島を取り巻く歴史的環境の一端を、一次的搬入された白磁皿が物語っている。

この他、御所浦島では東南アジア系と思われる金銅仏なども発見されており〔御所浦町1981〕、また京泊などの地名も残っており注目される。考古学的な調査が全くといってよいほど行われていない地域だけに、ガランさん遺跡周辺の調査によって、天草五人衆の交易実態が解明されることが期待される。

(4) 宮田城跡(天草市倉岳町宮田)(fig 7)

天草上島南部の八代海沿岸に立地する山城で、棚底城跡から南西に3kmほど離れて存在する。標高69.7mの丘陵頂部周辺が城跡で、コンパクトながら随所に堀切・堅堀などが配され、天草では数少ない嚴重な縄張りを持つ城である。

地上波デジタル中継局の建設にともない、主郭の一部、100m²強が発掘調査されている。主郭からの眺望がよく、眼下に穏やかな八代海が広がり、御所浦方面への視界が開けている。現時点で未報告であるが、棚底城跡同様岩盤に穿たれた柱穴群が検出され、貿易陶磁が出土した。しかしながら、遺構面となる岩盤は凹凸が非常に著しく、削平が行なわれていない。自然の岩盤に無理やり柱穴が掘り込まれている印象で、生活空間を作る上で基礎的な工程となる削平を実施していないことから、日常的な生活を意図していないように見受けられる。非整地の状況から柱穴は高床的な構造物の支柱と思われ、物見櫓のような簡易な建物跡が想定されよう。このことから宮田城そのものの役割も境目の砦的な存在と見たい。なお、城跡麓西側には今も「境目」の地名が残り、栖本・上津浦の領域境があったことを想起させる。

主郭のみの発掘調査で、遺物は主に地山である砂岩の風化土による包含層から見られ、出土陶磁器の点数は91点であった。内訳は国産の瓦質土器・須恵質土器が10点、土師器皿は煤の付着した小皿1点のみで、残りは全て貿易陶磁で80点あり、出土遺物全体の中で貿易陶磁が占める割合は88%に及ぶ。棚底城跡同様、青磁C群碗(84)、青花C群碗(87)や青花B1群皿が主要な貿易陶磁を構成し、ほとんど日常的な碗皿で占められるが、その中に、五彩碗片(88)や呉須が緑色に発色する華南漳州窯系の粗製青花碗(90)などが見られる。この粗製の碗は、やや腰高の器形に文様は圏線のみシンプルなもので、口縁内外と見込、高台周辺の計四本に圏線が廻るが、これが濁りの強い緑色を呈している。高台は欠損しており、微かに見込の釉剥ぎと高台周辺が無釉となる状況が確認できる。器形と圏線のみに限られた文様から森毅によって「豊臣前期」に位置づけられた製品と考えられ、1583年～1598年の範疇で捉えられる資料である〔森2000〕。圏線のみで文様が構成される青花は、後述する三川城跡でも出土している。五彩碗は薄手のタイプで、同一個体と見られる3点出土し、そのうち1点を図に示した。口縁外面、内面ともに四方嚮を基調とする文様を持つ。

宮田城跡では盤、壺等の大型の室礼用具や天目、花生、香炉等遊興用具などは一切出土しておらず、ほとんどが碗・皿の日常什器である。遺構と在り様と連動して、城主のはっきりしない砦的な城跡としての性格を示す。

このような砦的な城郭においても、出土する遺物のほとんどが貿易陶磁で占められることが、中世天草の特筆すべき状況と考えられる。在地領主が兵力として抱える人的資源の、かなり幅広い階層にまで、貿易陶磁の使用が行き届いており、極めて普遍的な存在であったことが考えられる。全国的に見れば出土例の少ない五彩碗が出土しているが、天草では入手機会の割合多い陶磁器であったと考えて差し支えないと思われる。

（5）河内浦城跡（天草市河浦町一町田）（fig 8）

天草下島南部、羊角湾の奥まった地点に残る城郭で、天草氏の居城である。平成元年に城内に立地する崇円寺の墓地造成計画が持ち上がり、1郭南の帯曲輪が発掘調査され、埋没した堀切と不定形の土坑が検出された。その土坑からは土師器皿を中心に100点前後の遺物が出土、貿易陶磁としては白磁B群八角坏（94）や青花C群皿（96）などの普遍的な碗皿の他、ベトナム産鉄絵大皿（103）や磁州窯系鉄絵龍文壺（104）などの希少品も発見された。

平成3年には第2次調査として1郭の主曲輪が発掘され、5棟の堀立柱建物跡が検出されている。出土貿易陶磁の数量自体は、天草五人衆における天草氏の勢力から勘案するとやや寂寥感がある。調査区となった帯曲輪のさらに南側の段下に、天草を代表する近世寺院崇円寺があり、居館跡は崇円寺周辺に比定されている。天草氏の生活の拠点はそちらにあったと考える方が自然ではある。

1次調査の土坑から出土したベトナム産鉄絵大皿は復元口径28.6cm。体部は緩やかに内湾するが、口縁部は軽く折縁状態となる。青磁盤のような明瞭な折れではない。文様はベトナム系独特の軽い筆致の鉄絵で、口縁と見込に圈線と草花文を描く。色調は全体的に黄色で、鉄絵部分の発色は甘く所々擦れがちに見受けられる。碗や皿などの小型食器が多い傾向の国内出土のベトナム産陶磁器にあって珍しい大型食器で、威信財的な利用が想定される。国内での類例は筆者の乏しい知識では知りえず、ベトナム陶磁関連論考の中でも見受けられない。現在のところ、森本朝子が参考資料として提示しているマレーシアチオマン島ジュアラ遺跡出土の幅広輪高台の鉄絵皿が最も類似した資料と思われる〔森本1993・1995〕。河内浦城跡の出土品は高台が欠損しているため確実ではないが、口縁の折れ具合や鉄絵の状況からは同種である可能性が高い。幅広輪高台を持つ皿は森本が提示する初期ベトナム陶磁、即ち14世紀中葉から15世紀前半に位置づけられ、棚底城跡出土ベトナム青花碗と同時期のものと考えられよう。

磁州窯系鉄絵壺は、長崎県小蘭城跡に出土例があるが〔町田1991〕、希少な流通例であることは相違ない。類似した資料について13～14世紀頃の年代観が示されている〔大阪市立美術館2002〕ので、本例も生産年代が使用年代よりも100～200年遡る可能性が高い。

102は施釉播鉢陶器で、硬く焼き締められた器色は小豆色を呈し、外面胴部には褐釉が掛けられている。丸く玉縁状に作り、外反する口縁が特徴的である。天草では例のない胎土、釉であることから中国産の焼締播鉢と見ている。101は瀬戸美濃皿で、東日本では通有の流通品であるが、天草では他にほとんど出土していない。

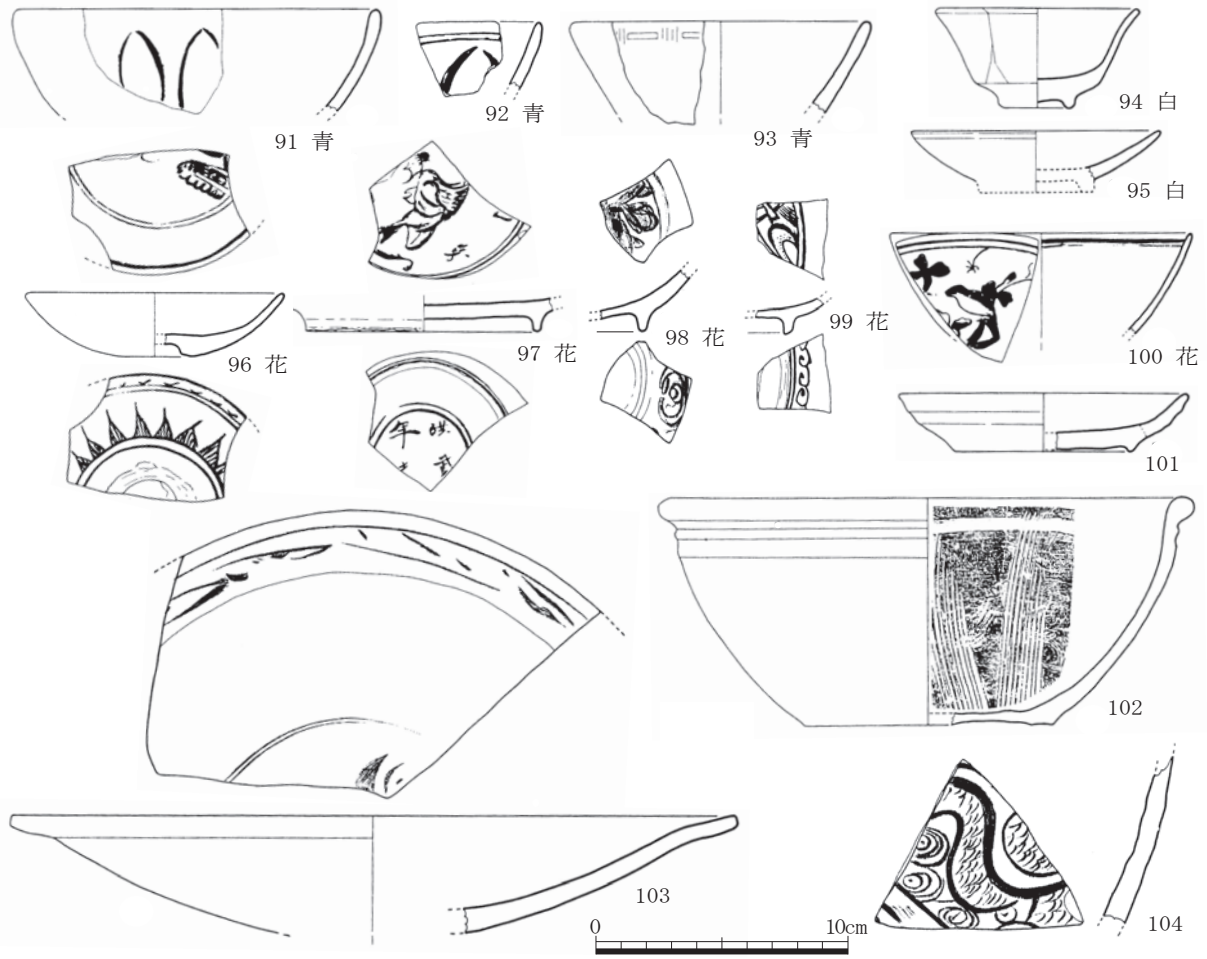


fig 8 河内浦城跡出土貿易陶磁 (1 / 3)

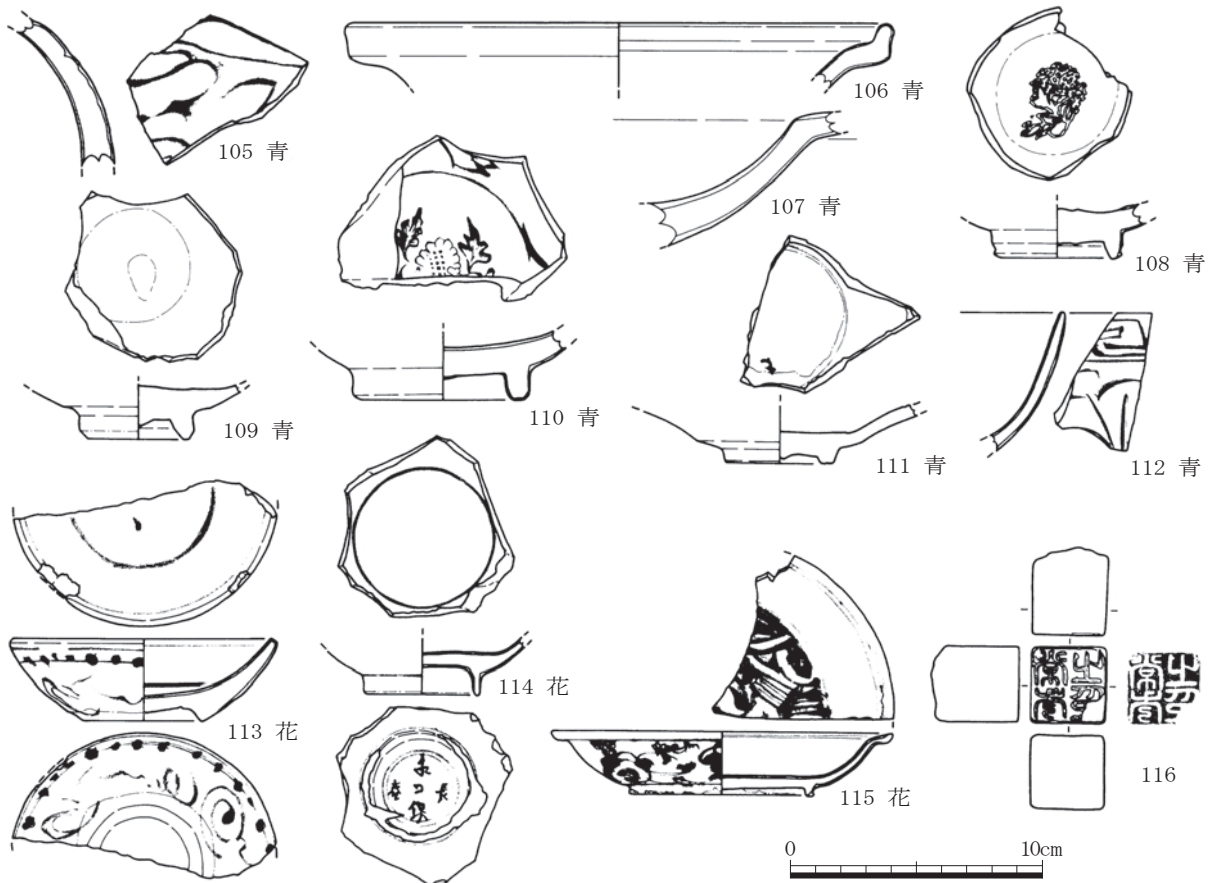


fig 9 本渡城跡出土貿易陶磁 (1 / 3)

これらが出土した土坑そのものの年代は、唐津系の鉄絵陶器などが含まれるので、16世紀末から17世紀初頭の遺構と考えられる。ただし、出土した貿易陶磁は天草氏時代である15世紀頃の破片が多い。河内浦城跡は慶長6年（1602）に寺澤氏による天草統治が始まってからは、寺澤氏の支城となるが、為政者交替に伴う廃絶であろうか。廃棄された遺物の多くは天草氏が使用していたものであろう。

碗や皿のような日常生活用形態でなく、大皿や壺など空間装飾的要素が濃厚な器種が出土している点が河内浦城跡の特徴である。これらは天草氏没落時あるいは寺澤支配期の初期に投棄されたが、それ以前は室礼用のアンティークとして珍重されたと見られる。棚底城跡や宮田城跡などと異なり、五人衆の居城クラスにおける出土例として理解されよう。

（6）本渡城跡（天草市船ノ尾町）（fig 9・10）

本渡城跡は天草下島の中央やや北よりに位置する。浜崎遺跡西方の低丘陵に築かれた城郭で、現在は都市公園となって開発が進んでいる。城跡の中心曲輪には、天草キリシタン館が建築されており、昭和30年代に実施された周辺地形の造成のため、本来の城郭地形は判断が難しい。しかし、キリシタン館からは天草市の中心部と上島北部海岸線が一望でき、素晴らしい眺望を誇る城郭である。

本渡城は天草氏の拠点城郭として機能したと見られ、16世紀には本渡地域の覇権を競った志岐氏と争奪の対象になったと見られる。記録上では永禄8年（1565）に志岐・栖本・有馬・出水島津の連合軍から攻撃を受け（tab 1 No43）、また文亀年間には、キリスト教布教の是非をめぐって天草氏当主天草尚種と二人の弟の間に内紛が発生、河内浦城を追われた尚種が、一時、本渡城に籠って体制を整えたことが知られている。

天正17年（1589）には、五人衆が小西行長の宇土城普請助力を拒んだために、行長と加藤清正の征伐を招く。この戦いは天正天草合戦と呼ばれ、秀吉政権下における最後の国衆の抵抗として知られる。本渡周辺の数多くのキリシタンが籠城、苛烈な抵抗を見せたが城主天草種元は自刃、多くの生命とともに本渡城は落城した。

天草キリシタンの悲劇を語る貴重な遺跡ながら、一帯の開発が戦後間もない時期であったため、開発に先立つ発掘調査がほとんど実施されていない。しかし工事によって出土した遺物を理解ある人々が採集し、今日に残してくれており、貴重な資料となっている。また近年、極めて限定された部分ながら、天草市教育委員会で調査を実施し、一定量の土器や陶磁器の出土が見られている。

採集品及び調査で出土した土器・陶磁器は計616点で、うち土師器皿（119～122）と坏（123～126）が78%を数える〔天草市2010〕。国内各地の城館では妥当な数値といえようが、こと天草に限って言えば、むしろ特異な部類に入る。

土師器は、かわらけとも呼ばれ、一度の使用で廃棄される大量消費型の遺物である。現在でも神事などに使われることがあるように、使い捨てにされることで付加される清浄性に重きがおかれた器であった。室町時代には、ハレの場における式三献などの献杯儀礼や宴会に利用され、武家というコミュニティの維持に欠くべからざる重要な役割を担った。居館や城郭などの中世遺跡においては、特定の空間で大量に土師器が出土することが少なからずあり、主殿や会所などの空間復元上の重要な資料となっている。特に戦国期の大名クラスの城郭などでは、各種の出土遺物の中で、土師器の数量が圧倒的多数を

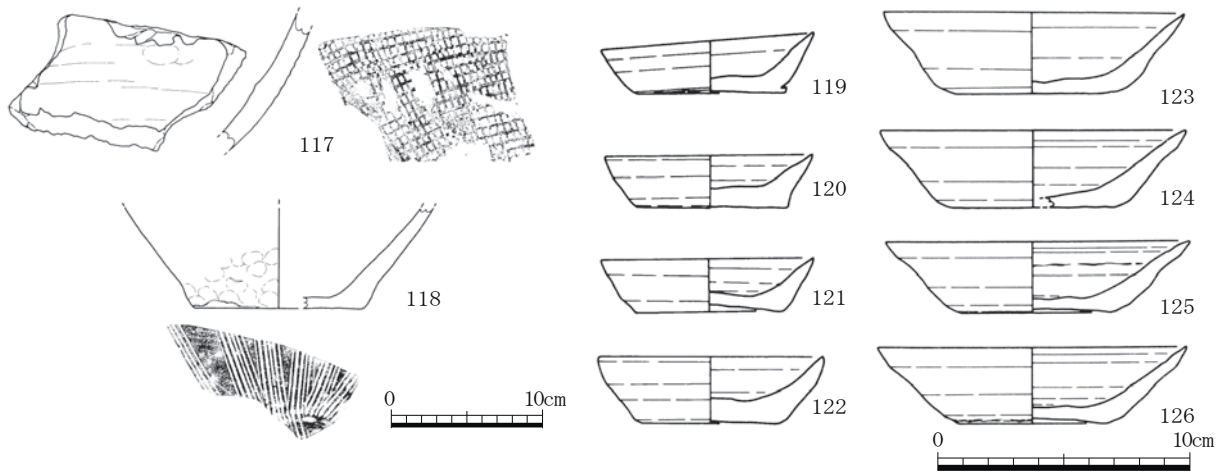


fig10 本渡城跡出土土器 (117·118: 1/5, 119~126: 1/3)

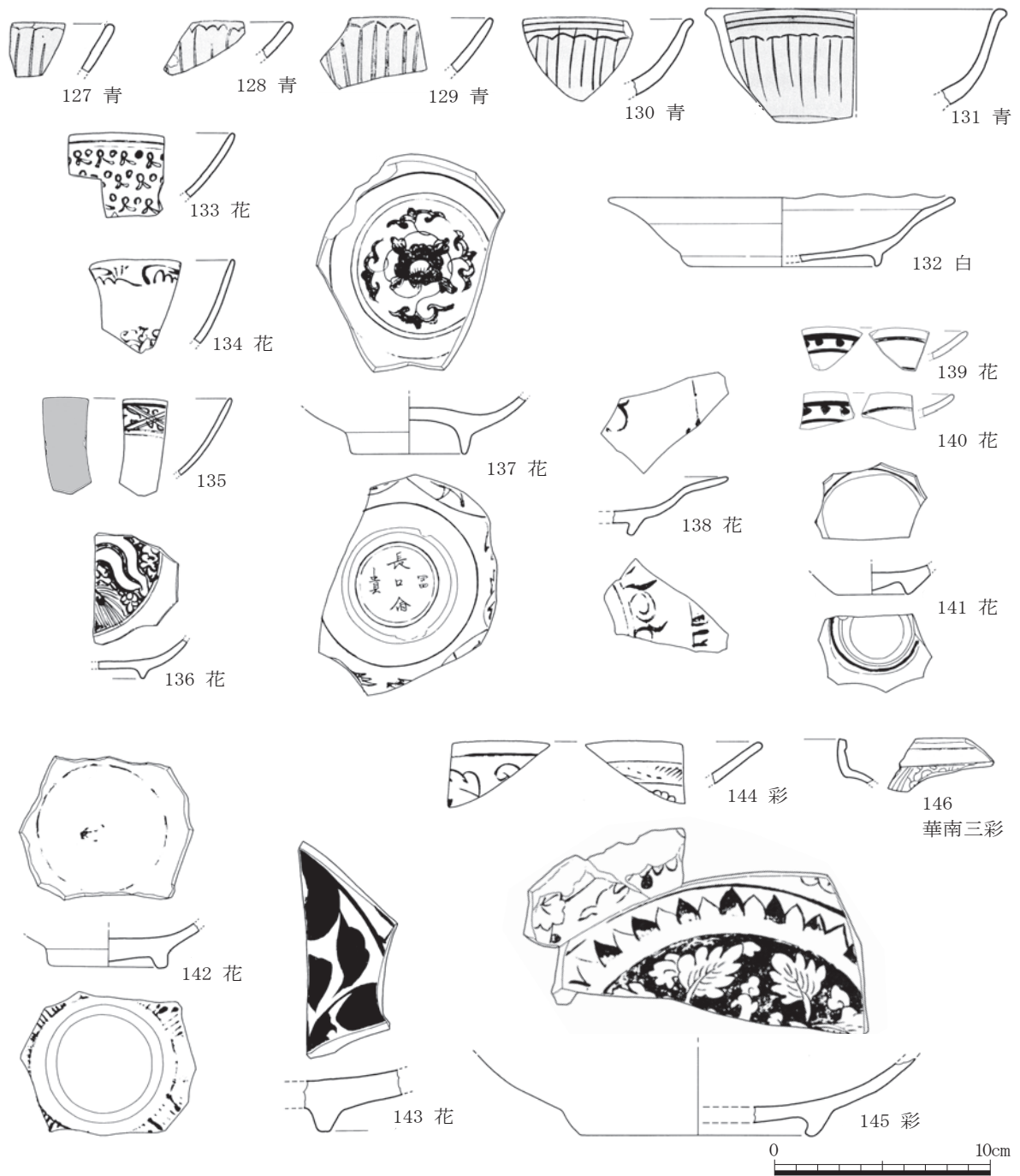


fig11 三川城跡出土貿易陶磁 (1/3)

占める事例が多く、本渡城跡の出土比率はこれに近い数値を示す。

一方、天草では棚底城跡など多くの城郭で、土師器よりも貿易陶磁の出土数が上回る例が見られ、特徴的な生活様相が浮かび上がってくる。特に宮田城跡や後述する三川城跡ではほぼ土師器が出土せず、本渡城跡の状況と対極に位置する状況である。この偏在には、縁辺島嶼における土師器を利用した宴や武家儀礼の浸透について、地域ごとにかかなりの偏差があったのではないかと茫漠と考えている。このように中世城館の生活様式に関わる大きな問題が内在しているが、まだ各城郭での調査面積が不足している現状では、論じられるレベルにないため、今後の課題としておきたい。

さて、本渡城跡から出土した陶磁器は、龍泉窯系青磁で見込を全釉剥ぎする碗（109）や皿（111）、景德鎮系青花E群碗（114）、漳州窯系碁笥底皿（113）などがある。

注目される資料として105の龍泉窯系青磁の酒海壺がある。同一個体と思われる破片2点が出土しているが、1点を図示した。酒海壺は所有することで権威や富を表徴する威信財〔小野2003〕としての陶磁器の代表的なもので、賓客をもてなす場や宴会で梅瓶等と同様に酒器として利用された。本渡城跡では、主郭と思われる高台付近で採集されている。天草の他の城館では出土していないものである。116は陶磁器ではなく石製の印章。「常秀之印」と刻まれる。

本渡城跡では、上記の通り土師器が78%を占め、貿易陶磁の比率は15%にとどまっている。多くの遺物が採集資料であり、遺跡本来での構成比率を示していないが、現段階では威信財や土師器儀礼の重視の傾向が見られる点が特徴といえよう。

（7）三川城跡（天草市五和町城河原）（fig11）

天草下島北東の内陸部、内野川沿いに立地する城郭。内野川は天草下島北部を南北に流れる小河川で、内陸部から下島北端の二江港へ流れ出る。城跡付近で、内野川とその支流、打越川・平川が合流するため、三川城跡と呼ばれている。標高50m程度の舌状台地上に築かれた城で全長319m、棚底城跡と並ぶ規模で、天草では長大な部類の城郭である。主要な曲輪は3つ、南北方向に配置され各曲輪間を断ち切るように堀切が設けられている。城跡は文献資料等の記載がなく、城主や年代は不明であるが、志岐・天草の争奪が繰り返された本渡城より北へ直線距離で約5km離れていることから、志岐氏の勢力に属していた城郭と考えられる。

発掘調査は平成7年に、五和町史編纂事業において中世城郭の基礎資料蓄積のために実施され、最も北の1郭曲輪の主体部を中心に約400㎡ほどの規模のトレンチ調査が行われた。1郭のトレンチでは、二間×二間の掘立柱建物跡が2棟検出されているが、出土遺物の大多数はその北端で検出された不定形土坑からまとめて出土しており、河内浦城跡の廃棄土坑と同様の性質と思われる遺構である。

出土貿易陶磁は些少な調査範囲ながら199点を数え、なかでも青花が144点と大多数を占める。若干の15世紀頃の遺物もあるが、多くは16世紀中葉～後半頃のものである。内湾タイプの青花E群皿（136）や罌皿タイプの青花F群皿（138）、同じタイプの罌を持つ白磁皿（132）などは、16世紀末に近い時期に位置づけられる陶磁器で、棚底城跡などでは見られないタイプである。

貿易陶磁の他には瓦質土器が3点と土師器皿が2点見られるだけで、貿易陶磁と国産土器・陶磁器の比率は97：3となる。調査範囲が狭く局所的である点から、城跡全体の傾向は将来の課題として認識し

ておく必要があるが、現状、やきもの全体の種別割合の傾向は宮田城跡を超えるほどに、貿易陶磁が卓越する。

記録に残っていないため、歴史的な位置付けが不明瞭な城郭ながら貿易陶磁には相当に希少な製品が見られる。

135は景德鎮系の緑地金襴手碗の破片と見られる。基本的には口縁内側に四方襷文が見られる青花E群碗だが、外面に緑釉を施して二次焼成してある。本来あるべきはずの金彩は失われているが、緑釉部分を仔細に観察すると溶剤のようなものが塗布された痕跡が残り、釉が欠損している部分にわずかに微量の金彩の付着が確認されるため、金襴手として相違ないであろう。国内遺跡での出土例は大友氏豊後府内から出土した紅地金襴手碗が知られるが〔王永2010〕、国内における出土例は極めて少ないと思われる。

146は華南三彩の角瓶口縁部である。華南三彩は豊後府内など16世紀における国際性豊かな都市遺跡や城館で多く見られる施釉陶器であり、南蛮貿易との関連が指摘されている〔川口2009〕。三川城跡出土例は直立する口縁と屈折した肩部から成る破片で、小型の方形瓶タイプと考えられる。口縁外側に緑色釉、内側に黄色釉が施され原色の色彩が美しい。肥後地域における華南三彩は、阿蘇大宮司の居館浜の館から出土した鳥形タイプ・水注タイプの完形品がよく知られており、阿蘇大宮司の宝物として考えられている。天草では本例と棚底城跡から出土した緑釉盤の細片（42）が出土している。

また、柏葉文を描いた五彩大皿（144、145）や漳州窯系の青花大皿（143）もあり、総じてランクが高い陶磁器が見られることが特筆される。五彩大皿は大内氏館等での出土が見られるが、全国的に見ても希少な部類に入るであろう。

三川城跡は内陸部に立地し、貿易陶磁の流通に適していないような印象を受けるが、早崎海峡へと注ぐ内野川の水運を利用して運搬されたのであろうか。内野川河口に位置する二江港は、アビラ=ヒロンの『日本王国紀』に「志岐・崎津・牛深の主要港に次ぐ小型港」として紹介されている〔会田・佐久間訳1965〕。1566年以降南蛮船が度々訪れた志岐の港からもほど近く、10km程度の隔たりしかない。そして、同じ志岐氏の領域内にあった。すぐ北には「唐通詞」との関連をうかがわせる通詞島が浮かび、島内には天草ではここにしかない六角井戸が2基残っている。有明海の喉元に位置する二江港は国際色豊かな賑わいを見せていたと思われる。

三川城跡の貿易陶磁は、他の出土遺跡のものに比べ、時期的にも質的にも、そしてその地理背景的にも南蛮貿易との関連を想起させる事例といえよう。

このような遺物が領主居城ではない支城から出土するあたりが天草らしさを示しており、今後もこのような事例が増えることが期待される。

（8）その他の遺跡

縄文時代の漁撈遺跡として、全国的に著名な本渡地域の矢野遺跡においても浜崎遺跡と同時期の貿易陶磁が出土している。また、浜崎遺跡の南にある本渡北小学校プール遺跡でも若干の出土が見られる〔本渡市1998〕。12～13世紀前後の流通については、地頭天草氏の本拠である浜崎遺跡に物品が最も集積したが、本渡地域では、広瀬川河口から中世の海岸線づたいに各所に散布しているものと考えられる。

調査が実施されていない城郭でも、栖本氏の居城、栖本城跡で龍泉窯系の青磁碗や盤、上津浦氏居城、上津浦城跡で白磁B群皿などが採集されている。

牛深地域に立地する久玉城跡では、昭和48年の熊本県教育委員会による発掘調査で青花C群碗片などが見られており、白磁B群皿などの散布が現在も確認される。

志岐氏の居城、志岐城跡は昭和55年、平成6年に主郭のトレンチ調査がなされ苓北町教育委員会により報告されている〔苓北町1994〕。貿易陶磁は龍泉窯系と見られる青磁蓋や青花E群碗などが見られる。最近、遺物再整理の中で、タイ産四耳壺片の存在が認識されており、今後の報告が期待される。

河内浦城跡の東に正対する下田城跡では、朝鮮半島産の象嵌青磁瓶が出土している〔河浦町1993〕。天草地方で確認された朝鮮半島産陶磁としては、唯一のものである。

4 地図から見る天草

天草の諸遺跡から出土した貿易陶磁を見てきた。浜崎遺跡や棚底城跡を除けば、ほとんどの遺跡が部分的な調査にとどまっており、その調査面積は極めて少ない。にも係わらず、各遺跡で希少価値の高い貿易陶磁が出土している傾向は、中世天草の人々が国内よりむしろ海外へ目を向け、さまざまな活動を行っていたことの反映に他ならない。蓋し、生産性が決して高いとはいえない土地柄と列島縁辺に位置する地理的環境からすれば、一度の往来で大きな利益を産み出す海外との通交に傾倒するのは当然のことであろう。

しかしながら、その背景については天草五人衆自身が大陸と直接的に関与した記録は皆無に近く、詳細に迫るのは難しいため、ここでは朝鮮や明の日本研究書に記載された地図や積極的に対外交渉を行なった相良氏の事跡を引用して、その位置づけを分析してみたい。

fig12は15世紀～17世紀の倭寇対策書や兵書等において九州を描いた図を集成したものである。なお各図の成立については九州大学デジタルアーカイブの解説を参照した（<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/eastasia>）。

fig12-①は朝鮮通信使であった申叔舟が文明3年（1471）に著した『海東諸国紀』の「日本国西海道九州図」で、天草は半円状の島として描かれ、肥後国の玄関口としての位置づけとなっている。「天草津」即ち港としての機能を有していたこと、坊津～松浦に至る九州西岸航路の中間に位置していること、肥後の支配者として「菊池殿」がいることがわかる。海東諸国紀本文には、肥後国で朝鮮との交易を行っている人物として菊池為邦、菊池為房、名和教信、大橋正重、高瀬武教が挙げられているが、天草の領主は記されていない。当時、上津浦邦種が菊池為邦から、志岐重遠が菊池重朝から偏諱を受けていたと見られ、天草衆は菊池氏と主従関係にあり〔高野2007〕、航海術に長けた存在としてなんらかの関与が想定されるところだが、九州北岸の遺跡で頻繁に出土する朝鮮半島産の貿易陶磁が、天草では下田城跡を除けば皆無であり、朝鮮半島との通商の実態は定かでない。ともあれ、15世紀後半段階から天草津が九州西岸の代表的港湾として認識されていたことは注目しておきたい。

Fig12-②は明の章潢が天文10年（1541）から天正5年（1577）にかけて編纂した『図書篇』中の「日本国図」、九州部分である。鄭若曾が編纂した『籌海図編』の系統を引く行基図で、各国の代表港湾名が



①『海東諸国紀』「日本国西海道九州図」



②『図書篇』「日本国図」



③『登壇必究』「日本国図」



④『日本一鑑』九州図



⑤『武備志』「日本図」

fig12 海外から見た天草の姿

記されている。籌海図編の編纂が永禄5年（1562）であることから、図書篇の図もさほど変わらない年代に作成されたと考えられ、16世紀中葉の港湾の立地を示していよう。「才子世録」（八代）、「開懷世利」（川尻）、「哈家什」（高瀬）、「昏陀」（宇土）などとともに「阿麻国撒」（天草）がある。「介鳥湖」は比定地不明ながら、籌海図編の方では「一国撒介鳥刺」と記され、「いくさがうら」として、「軍が浦」という天草内の港と想定される。ただし、軍が浦（天草市大江）と天草港（天草市河浦）は同じ羊角湾沿いにあるため、やや距離が近すぎるきらいもある。介鳥湖・一国撒介鳥刺の比定は肥後の中世港湾を考える上で、大きな課題である。

fig12-③は慶長4年（1599）に王鳴鶴がまとめた『登壇必究』の「日本国図」。天草は2島に分れ、天草下島・天草上島が正確に認識されていることがわかる。左の島（天草下島）には家屋が描かれ都市の存在がわかり、右の天草上島には山が描かれ、峻険な山岳が表現されている。棚底城跡の背後に聳える天草で最も高い倉岳をランドマークとして記したのであろうか。両島とも「天草山」と記載されており、山がちで平野が少ない島という認識は、この時代には普遍的であったといえよう。地図上では、かなり西の海に突出しているイメージで、南からの航路上の指標となる存在だったのであろうか。

肥後には「江津」の港があり、「浙江より四日四夜で至る」「涪州より十日十夜で至る」と記されている。松下見林版では「涪州」とあるが〔松下1975〕、涪州は内陸の重慶周辺のため、この場合は「漳州」からの往来を示すのではないかと考えられる。浙江・漳州からの肥後への往来があったことを示しており、漳州窯系青花を始めとする華南産貿易陶磁の流入を検討する上で注目される。なお、「江津」は有明海から緑川を遡った先にある熊本市画図付近である。

fig12-④は、時代が前後するが、明の鄭舜功が著した『日本一鑑』に描かれた九州の地図をトレースしたものである。鄭舜功は倭寇禁圧を日本に要請する使者として、弘治2年（1556）豊後に来航し、大友宗麟の下に六ヶ月滞在した。実際に来日した中で情報を収集し、1567～1573年頃に『日本一鑑』を完成させた〔神戸2000a〕。直接、渡航してきた明人が見聞した著書として、資料価値の高さが注目される。

地図における九州西岸は、「入唐道」となっている豊津（坊津）から、門泊（泊）、片浦、伊筑（市来）、京津（京泊）と北上し、阿久根、八代、小野瀬（郡浦か）を経て、天草に至る。天草の脇から入る内海（有明海）には、白川湊（熊本港）、鷹瀬（高瀬）が描かれる。天草はやや小さく描かれているが、京泊（薩摩川内市）の次の港として直結する位置にあり、白川港を抱く有明海への入り口を固めている様子が理解される。地形そのものは、実際に比べかなり変形しているものの、当時の港湾位置情報を詳細に記録しており、航路の復元に欠かせない情報を提供している。

fig12-⑤は元和7年（1621）に茅元儀により編纂された『武備志』の「日本国図」である。坊津・泊津・久志・秋目と坊津の湾岸がかなりクローズアップして描かれる。片浦、小松原（加世田）、串木野、京泊、阿久根と続き、配置は『日本一鑑』と類似する。その沖合いに天草港、志岐が浮かぶ。肥後内海の港や肥前の港はかなり省略されており、志岐の次が平戸津となり、天草のさらに沖に樺島がある。天草と志岐を別の島と認識している点が、他の地図と異なる。実際には天草港と志岐港は同じ天草下島にあるが、宣教師の記録にも志岐と天草がしばしば別の島として認識されることもあるため、当時の感覚としておかしくはないのであろう。京泊・阿久根・樺島などは日本一鑑と共通し、当時、恒常的に拠点として機能した港湾を把握する上で有益である。

海外から見た九州の地理情報には、「天草」が必ず記されており、基本情報として欠くことのできない位置づけにあったことが読み取れる。天草の重要性は、市舶司のある寧波との距離の近さだけではなく、有明海と八代海という重要な内海を形成する島であったことも大きな比重を占めていたと考えられる。二つの内海は、北は佐賀から南は出水まで繋がり、その長さは南北約120kmに及ぶ長大なものである。沿岸部には数多くの都市と有力者があり、そこから生み出される大きな権益を内包していた。両海への入り口は、出水と長島の間を通る「黒ノ瀬戸」、長島と牛深の間を通る「長島海峡」、志岐と口之津の間を通る「早崎海峡」の三ヶ所のみであり、いずれもが狭い水道となっている。天草を通過しなければ、内海へ進入することはできず、各水道はさながら「海の関所」であった。

対馬や五島が倭寇の根拠地足りえた理由は、入り組んだ海岸線を持つ多島海であり、船を隠す場所に事欠かなかった点が大きいと考えられよう。天草諸島そのものは、御所浦島周辺や大矢野島周辺を除けば、小島や複雑な入り江が多いとは言えない。しかし、島そのものが内海を形作り、その虎口と成っているという点で、九州西岸の航路上で、重要な存在だったのであろう。

もう一点、登壇必究を除いた全ての図で、天草の「港」が認識されていることも、中世の天草の姿を検討する上で、重要なことといえる。それ自身は大きな港ではなく、寄港地としての性格が強いと思われるが、徳湊津、白川湊、高瀬港など内海の港湾都市へなんらかの理由で入れない時、東シナ海と直接繋がる天草港は大きな役割を成したことだろう。天草津の位置ははっきりと確定されてはいないが、まず羊角湾の深部、天草氏の膝元にあったと考えられる。河内浦城跡から出土したベトナム産陶磁器やむしろ中国の北部にあたる磁州窯で生産された鉄絵壺などから、河内浦城直近にあった天草津への搬入品が広範囲からもたらされたものであることがわかり、天草津に集まる交易品の多様性をうかがわせる。

5 天草と周辺域における海外交渉

続いて文献資料から、天草と海外との関係を見ていきたい。tab 1 に示した各文献の中で、天草が直接大陸と関係している記録は、No.10とNo.31のみで、いずれも大矢野島に係わるものである。

No.10は、天文14年（1545）に大矢野島へ中国船が来航したことを記している。そして、No.31は十年後、天文24年（1555）のことで「八代の植柳というところに、日向・肝属地方の明への渡航者が40人余りいて、その船を大矢野氏に進呈申し上げる」という意味であろうか。大矢野氏と中国との直接的な往来を示す貴重な資料といえよう。特に後者は大矢野氏が渡航船を入手したこと、大矢野氏が日向・肝属の人々とつながりを持っていたことがわかり興味深い。この場合、日向あるいは大隅（肝属）の人々なのか、本来「大隅の肝属」であるところを「日向の肝属」としたのか判然としないが、肝属といえば倭寇の拠点として知られるところである。その肝属の「渡唐ノ者」とのネットワークを有していたことが大矢野氏の性格を考える上での大きな材料となろう。『八代日記』ではこの他、No.7・8のように阿久根への明船到来も記録が残され、相良氏が周辺海域の対外接触に注意を払っていることが読み取れる。ただ、大矢野のように八代近郊ならともかく、東シナ海の志岐や天草（河内浦）の港の往来までも、詳細に把握できていたかどうかは疑問が残るところで、基本的には大矢野氏の渡航船所有に見るような直接的海外交渉への志向は、天草五人衆それぞれが狙っていたものと思われる。それはまさに天草各所から出土し

第3章 天草における中世の交流（中山）

tab 1 中世天草の対外関係年表

No.	年号	西暦	月	日	文	文献
1	享禄五年	1532	六月	十三日	天草（尚種）・志岐（重経）・栖本・大矢野・長嶋（但馬守）同心にて上津浦ニ動候、そのまま着陣候、同十六日八代上津浦治種ニ合力、一番衆御立候、同廿六日二番衆御立候、七月一日丁未上津浦にて合戦、相良六郎左衛門尉方打死、〔割注〕上津浦治種衆親類殿中間二十八人打死候	八代日記
2	天文七年	1538	六月	十九日	市木丸御船作始	八代日記
3	天文八年	1539	三月	三十日	市木丸為御覧御簾中様徳口（測）ニ御下候	八代日記
4	天文八年	1539	四月	十三日	市木丸出船候	八代日記
5	嘉靖壬寅	1541	五月	二十六日	宝翰三薫某読、万福々々、抑国料之商船渡越之儀、万緒如意、千喜万歡、無申計候、殊種々進献物、一々達上聴、御感激有余、□至于愚老、料々御珍覘拝納、不知所謝候、為表非礼、不腆方物砂糖百五十斤進献、叱留所仰也、此方時義、船頭可有披露候、万端期重来之便候、誠恐不備、 大明嘉靖壬寅閏五月廿六日 全叢（花押） 晋上 相良近江守殿 台閣下	相良家文書
6	天文十三年	1544	二月	二日	上津浦親類中、棚底下城	八代日記
7	天文十三年	1544	七月	二十七日	阿久根ニ唐舟着候、又廿九日ニモ着候	八代日記
8	天文十三年	1544	九月	十四日	阿久根の唐舟出舟仕候	八代日記
9	嘉靖乙巳	1545			夷属肥後国得請勘合於夷王宮、遣僧御来貢、以未及期、照例沮回、此勘合仍貯肥後	日本一鑑
10	天文十四年	1545	七月	十六日	天草大矢野ニ唐舟着候	八代日記
11	天文十四年	1545	十二月	二十八日	就御船渡唐奉行事、被仰付大内大宰大弐、令存知之、往還共以致警固、可被馳走之由、被仰出候也、執達如件、 天文十四年十二月廿八日 堯連（花押） 晴秀（花押） 相良宮内大輔殿	相良家文書
12	天文十五年	1546	二月	十八日	一本丸船頭兵部左衛門博多ニ御登候、四月三十日罷帰候	八代日記
13	天文十五年	1546	八月	九日	甌嶋ヨリ二階堂殿八代御越候、唐船可進候由候	八代日記
14	天文十五年	1546	八月	九日	甌島の城主某、二階堂頼母介をして来り賀せしむ	求麻外史
15	天文十五年	1546	十月	十日	就渡唐御船之儀、従京都被成、御下知之条、被付進候、急度以請文可有言上之由、可申旨候、恐々謹言 十月十日 弘成（花押） 宗長（花押） 相良右兵衛佐殿	相良家文書
16	天文十七年	1548	四月	七日	あくねきり八代ニテ作候唐船、江口まで出候	八代日記
17	天文二十年	1551	七月	八日	天草・上津浦・大矢野ヨリ栖本ニ動候、	八代日記
18	天文二十二年	1553			此年ヨリ日本ノ舟大明国ニ渡テ雜物ヲ追捕シテ帰朝ス	八代日記
19	天文二十二年	1553	三月	二十一日	天草ヨリノ兵船和泉ニヨセ候ヲ、和泉ヨリ津奈木ニ追入候	八代日記
20	天文二十三年	1554			去年今年両年日本ノ舟渡唐ス、大明追捕シテ帰朝ス	八代日記
21	天文二十三年	1554	二月	二十三日	晴廣さま御舟市木丸御作せ候、船おろし二候、晴廣さま・頼興さま徳測ニ御下候、休庵齋御申請候	八代日記
22	天文二十三年	1554	三月	二日	市木丸渡唐ノかといて、やかて郷（江カ）内仕候	八代日記
23	天文二十三年	1554	三月	四日	市木丸郷（江カ）口まで出候	八代日記
24	天文二十三年	1554	七月	十二日	渡唐仕候市木丸御船徳測着候、三月二日ニ渡唐ノかといて	八代日記
25	天文二十三年	1554	九月	六日	御屋形さま上国・唐行・スス銭之、此三ヶ条頼興又老者より衆義ニ御尋ね候	八代日記
26	天文二十四年	1555	三月	四日	八代ヨリ出候唐船、少々今日出候	八代日記
27	天文二十四年	1555	三月	五日	殿さま・頼興さま被遣候渡唐船出候	八代日記
28	天文二十四年	1555	三月	廿日	かさ屋唐船出候、四不出	八代日記
29	天文二十四年	1555	四月	八日	渡唐之船出候ハ、十一日之難風ニ悉吹ちらし候、十八艘、此内十六艘ハ八代船	八代日記
30	天文二十四年	1555	四月	二十一日	又唐渡之舟出候、廿三日之難風ニ吹もし本ノ地ニ着候	八代日記
31	天文二十四年	1555	六月	七日	植柳ニ日州肝月渡唐ノ者四十余人候、本舟ハ大矢野殿ニ進上申候よし申候	八代日記
32	天文二十四年	1555	七月	三日	細江渡唐ノ舟、殿さま上申候よし、頼直ヨリ五郎三郎を以御申候	八代日記
33	弘治二年	1556	三月	四日	徳淵森と申候者、渡唐船出候	八代日記
34	弘治二年	1556	六月	一日	上津浦ヨリ棚底之内、藤河拵破候	八代日記
35	弘治二年	1556	八月	二十六日	栖本ニ湯浦衆番立	八代日記
36	弘治二年	1556	十月	六日	津奈木衆栖本番二行候	八代日記
37	永禄元年	1558	三月	十六日	上津浦ヨリ棚底ニ動候、嶋子ヨリ下津浦ニ動候	八代日記
38	永禄元年	1558	五月	二十九日	去春ノ渡唐船徳測ニ着候	八代日記
39	永禄元年	1558	九月	二十三日	栖本為着陣、有馬諸勢上津浦ニ着船候、二百余艘	八代日記
40	永禄三年	1560	十一月	十九日	棚底之事、自栖本ヨリ上津浦へ被渡候、廿日ニ有馬諸勢如有馬帰陣、同廿五日 上津浦ヨリ延命院を以八代奉行まで被仰候、御異見を以棚底請取申候との御禮、	八代日記
41	嘉靖四十一年	1562			入寇者薩摩肥後長門三州之人居多、(略)日本之民有貧有富有淑有愚富而淑者或因貢舶或因商舶而來其在寇舶率皆貧而愚者	籌海図編
42	永禄七年	1564	六月	二十七日	上津浦ヨリ小嶋子、下砥岐天草殿ヨリ御去進られ候間本日知行ノ由	八代日記
43	永禄八年	1565	七月	二日	志岐・栖本・有馬・和泉同前ニテ本砥（渡）動、	八代日記
44		1570			(高瀬に向かう) この十四里 (の海上) では、絶えず海賊が徘徊しているので、右の各舟には多数の鉄砲を携え十分に武装した口之津の人々が乗っていた。	イエズス会 日本報告集
45		1574			口之津を出発して、島原へ向かった。(略) 彼らのうちの幾人かが武装して肥後の国の高瀬まで供をしてくれた。海では海賊船が出没するからである。	イエズス会 日本報告集
46		1585			この地（天草）ははなはだ険しい山が多く、生活必需品が欠乏しているので、司祭と修道士は絶えず相当な労苦に見舞われており、自らを支える杖となるのは慈悲心である	イエズス会 日本報告集

た希少な貿易陶磁が「モノの移動」という形で体現している。

さて、相良氏家老が記したとされる『八代日記』は、相良氏そのものの対外交渉をより詳しく教えてくれる存在である。中世後期に交易に力を注いだ戦国大名としては、大内氏、大友氏、島津氏がよく知られるところで、それぞれの城下は山口や府内といった国際都市として繁栄した。

しかし相良氏もそれに劣らず積極的に海外交易を行っていたことが文献史料から明らかとなっている。八代海に面した徳測津は、相良氏直轄の国際港として隆盛を誇った。この徳測津を起点として行なわれた相良氏による積極的な交易の実態についての研究としては蓑田鶴男の研究〔蓑田1972〕と田中健夫の研究〔田中1991b〕が挙げられる。これら先行研究の解釈を援用しながら分析を行ないたい。

相良氏と天草五人衆とは、相良氏の八代進出以降、基本的には各個が主従関係にあり、五人衆各氏は祝賀など事あるごとに八代に使者を遣わし、頻繁に通交していた。No.6に見るように本来、有明海沿岸を本拠とする上津浦氏が八代海側の棚底城跡を治めたり、またNo.42の通り、天草でも外洋の東シナ海に面する西方に勢力を持っていた天草氏が八代海の御所浦島へ進出していた事実は、相良氏との緊密な関係を求めてのことと考えられる。

また、逆に相良氏の側もNo.1やNo.35・No.36に見られるように、天草五人衆間での対立の際には軍勢を派遣し、手薄になった城の在番を務めさせるなど、積極的に五人衆同士の抗争に介入していた。八代日記を見る限り、相良氏側は劣勢に立たされている側を援助し、勢力均衡を企図している節がある。五人衆と相良氏とはそれほど濃密な関係にあるため、相良氏の対外政策にもなんらかの関与をしていた可能性は十分に考えられよう。

tab 1の対外関係資料の多くが相良氏が行った海外交渉の記録である。No.2・No.3・No.4は相良氏の渡唐（明）船「市木丸」の造船についての記事で、天文7年（1538）の六月に船造りが始められ、一年も経ずして翌四月には航海へ出ている。

No.5は琉球円覚寺の僧全叢から相良義滋に宛てた書簡で、相良氏が国料を積載した商船を琉球へ寄越したことへの礼文である。琉球側からの返礼の品は砂糖百五十斤であった。嘉靖壬寅は、嘉靖21年であるから、日本側の年号で言えば天文10年（1541）のものであり、時系列的にはこの商船が市木丸である可能性が高い。「万端重来之便期し候」と言うことから、通商の継続が行なわれたのであろうか。ともあれ、市木丸の竣工を契機に、相良氏がまずは中継貿易で栄えた琉球との通商に乗り出したことがうかがえる。

No.9は『日本一鑑』の記述で、嘉靖乙巳、即ち嘉靖25年（1545）における勘合に関するものである。「肥後国の者が、幕府より勘合を請け、僧御球を遣わし来貢した。許されず帰国し、勘合はまだ肥後に残っている。」との文意で、勘合が肥後にあることが注目される。勘合を所持していたとしたならば、その「肥後国の者」は相良氏と考えるのが妥当であろう。ただし、鄭舜功自身は『浙江通志』『寧波府志』が、肥後に勘合があるとしたのは誤りである」と批判しているため〔神戸2000a〕、No.9の記述は『浙江通志』『寧波府志』を引用した記事であろうか。

No.11・No.15はともに大内氏の家臣からの遣明船に関する文書である。周知の通り、大永3年（1523）の寧波の乱以降、遣明船は大内氏が独占することになった。2回派遣された大内遣明船は、天文5年（1536）と天文16年（1547）のものであるから、この両文書は2度目の遣明船に係る。No.11は遣明船

往還の警固を命じたもの、No15は警固についての請文を言上するように求めたものである。このことから相良氏は、大内船の警固を務める形で、最後の遣明船の一翼を担っていることとなり、勘合を所持しやすい立場にあったことが理解される。No12における市木丸船頭の二ヶ月に及ぶ博多逗留もこれに関係するものであろう。

豊後大友氏の交易を分析した鹿毛敏夫は、貿易政策の前提として「シナ海域の航海を安全に遂行できる技術、知識、経験を持つ海辺領主の家臣団の取り込みと組織化が必要条件」としている〔鹿毛2006〕。元来、内陸の人吉盆地に本拠を持つ相良氏は、15世紀後半段階に八代に進出、その後、海外交易に乗り出すこととなるが、さほど明への渡航に長けていたとは思えない。この点、天草衆にはそれを補うだけの経験が培われていただろうことは、出土した貿易陶磁からも十分に考えられる。大友氏の場合は、真那井衆という水軍衆を警固船団として抱えていたが、相良氏の場合は天草衆がその役目を果たした可能性が想定される。

No13は、甌島の二階堂氏が八代に来て、明への渡航船を進発させるとの記事。田中健夫は八代から出航させたのか、甌島から出航させることを八代に伝えたのかが明らかにできないとするが〔田中1991b〕、No14、同日の『求麻外史』によれば、二階堂氏の来訪は、相良義滋から晴広へ当主替わりへの祝賀が目的であるので、その折に甌島からの渡航を伝えたという意味の后者と考えられる。このことから甌島のような比較的小規模な島嶼領主でも、明への渡航船を直接送り出すだけの技術と船舶を有していたことがわかる。これは天草五人衆にも敷衍できることと考える。

No18・No20はいわゆる「嘉靖大倭寇」のことを示すもので、「倭寇に関する伝聞を後から加えたものに相違ない」〔田中1991b〕とされる。多くが明の官憲に追い立てられ戻ってきているという。大内遣明船を除けば、すべからず明側にとっては「倭寇」であり、追捕の対象であった。

No21～24は市木丸の造船と出航。即ち2代目新造の市木丸であったと考えられる。3月2日に徳淵を出航し、7月12日に帰着していることがわかり、4ヶ月で中国へ往来できたことを物語る。

No28・No33は個人による渡航を記録していると思われる。「かさ屋」と「森」の名前があり、おそらくは徳淵に根拠を置いていた豪商であろう。徳淵津からはこの頃、比較的自由に明へ出船していることがわかれる。

No29・No30は嵐で渡航に失敗した例を挙げている。風向きに恵まれることが、渡航の大きな条件であった。注目すべきは18隻という渡唐船の数である。渡航に際し、一定以上の規模の船団を編成していたことが明らかである。また、そのうち16隻が「八代船」とあることから、徳淵津で建造された船舶であったと見られる。

この他にも数件の渡航船あるいは明からの来航船の記録があり、数々の記録から八代海における海外との接触は極めて頻度の高いものであったことが判明している。

相良氏の積極的な交易推進政策が読み取れること以上に、大矢野氏や甌島の二階堂氏などの小領主あるいは、徳淵津に基盤を持つ豪商が独自に渡航船を出していたことが注目されよう。

また、本来は遣明船によらなければもたらされないはずの貴重な渡来品を積載した船舶が往来していた事実は、同時にその積荷を狙う存在も活性化させたと考えられる。これは少し後に南蛮船が来航するようになってからも顕著であった。

宣教師による記録は、有明海上の治安の劣悪さを具体的に伝える。No.44・No.45はいずれも島原半島の口之津港から肥後北部菊池川河口の高瀬港までの移動に関する史料であるが、相当に海賊が徘徊していたことがうかがい知れる文章である。海賊の根城が気に掛かるところであり、環有明海一帯で、比較的自由に船を隠しうるという条件に天草諸島は十分適合している。

内海での海賊行為だけでなく、No.41『籌海図編』の記述に「倭寇として来る者は薩摩・肥後・長門の人間が最も多く（中略）、裕福な者は交易に来て、貧しい者は掠奪に来る」とある通り、肥後は後期倭寇の構成員が最も多い国の一つとして認識されていた。No.46に天草の困窮ぶりが示されていること、上述したfig12の各地図における天草の描写などから勘案して、天草の島々が倭寇の根拠地の一つであった可能性はかなり高いと筆者は考えている。

八代海あるいは有明海一帯の歴史的背景から検討すると、天草では私貿易あるいは海賊行為両面とも盛んであったと思われ、貿易陶磁比率の高さや希少種の出土はこのような天草を取り巻く環境に裏づけされたものと見ることができよう。

まとめ

以上、天草の貿易陶磁について、各遺跡ごとに特筆すべき製品と組成上の特徴を述べ、その流入背景

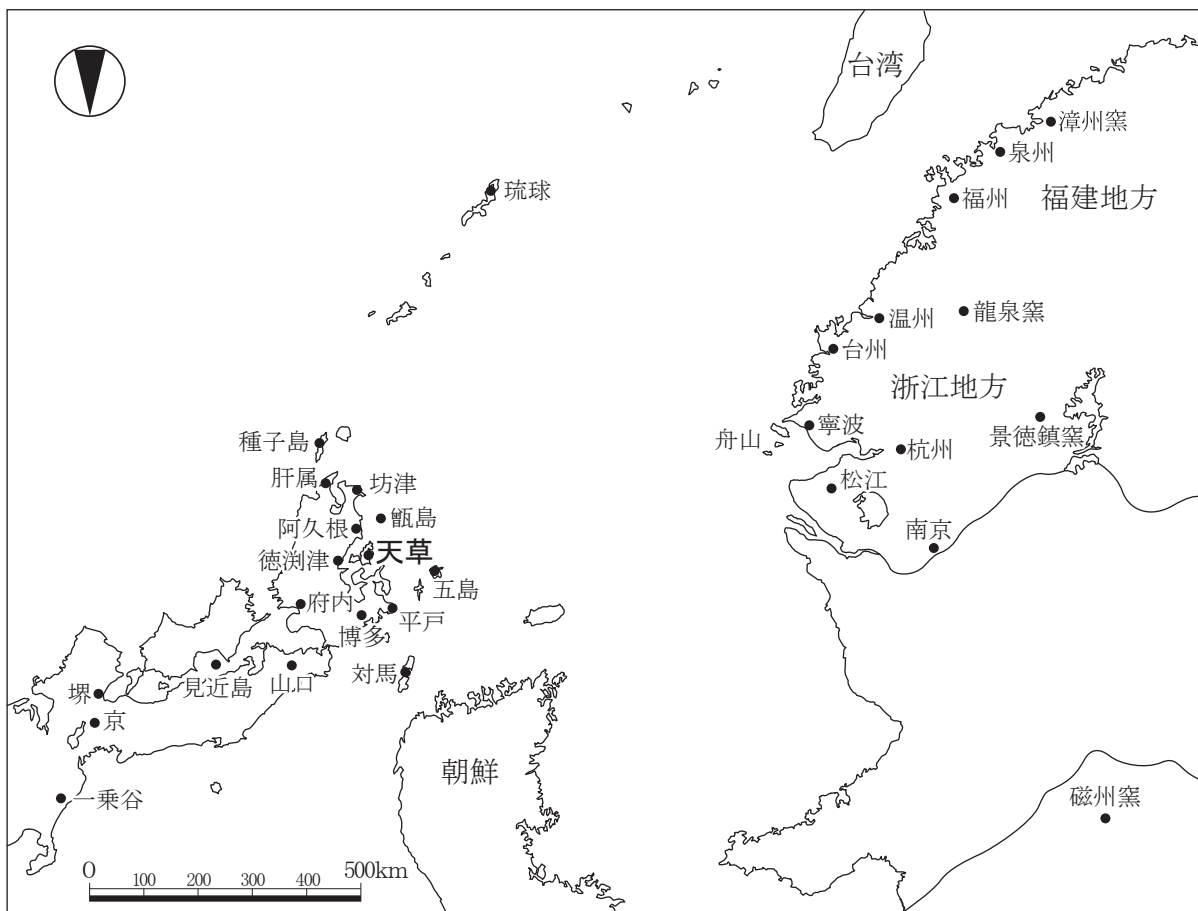


fig13 天草から見た東アジア図

を海外の地図に描写されている天草の姿や徳津津を中心とする八代海での明船往来の記録から求められる海外交流の頻度の高さに求めた。

天草における出土貿易陶磁の特徴は、各遺跡からそれぞれ全国的に見れば希少と思われる製品が見られること、棚底城跡のベトナム陶磁のように室町時代の早い段階から東南アジア陶磁器も見られること、支城レベルの城郭で貿易陶磁比率が高く、日常什器として幅広い階層に貿易陶磁が行き渡っていたことなどがあげられる。その出土状況は、中世を通じて、中国を中心とした東アジアとの往来があったことを反映しているといえる。

八代海での往来を記した記録そのものは、16世紀中頃に活況を呈していることを教えてくれるが、貿易陶磁そのものを見てみると、それ以前から天草と中国とは活発に交流していたと思わざるを得ない。五島や坊津には及ばないまでも、天草が外洋を往来する船舶の玄関口として一定の役割を担っていたことは、貿易陶磁の浸透性や希少品の出土が示唆している。

数少ない調査回数、そして狭い面積に過ぎない考古学的な発掘調査の中で、これだけの資料が見られるという視点を基軸に論考を進めてきたが、その分、各遺跡において局所的傾向に過ぎないのではないかという資料上の限界にも突き当たり、不十分な面が多くある。今後の発掘調査による分析分母増加、及び個別の遺跡全域をカバーした出土状況の分析が必須であり、大きな課題として位置づけておきたい。

また、本稿ではほとんど触れることができなかったが、国内で遍く流通する瀬戸美濃系陶器や備前焼播鉢などがほとんど流通していないことも、天草での陶磁器流通上の大きな課題と捉えている。九州西方の海に浮かぶ島は、東アジアから見れば玄関口の一つであり、他方、列島の中では周縁部であり、国産品の流通ルートからすれば最も遠い場所であったかもしれない。「出土したモノ」に対し「出土していないモノ」に関しては分析が難しくなるが、列島で広域に流通している陶磁器については、分析する陶磁器破片の増加を待った後で、丹念に出土遺物の組成を検討していくことで一定の考察が可能となろう。将来的には、流入しやすい貿易陶磁が一般に普及し、一方で国内の交易流通品が行き渡らない、そのような海外志向の強い天草の姿が浮き彫りになると推察している。

大仰なタイトルに対して明らかにできたことは少ないが、天草出土の貿易陶磁と関連する史料類から、天草とその周辺海域が、いかに中世から国際的であったかについて、若干の提示はできたかと思う。本稿を作成する中で痛切に感じたことは、天草に見られる貿易陶磁から中世の歴史を見つめる時、「アジア史の中の天草」として、その位置づけを考えることがなによりも重要だということであった。

最後に執筆の機会を与えてくださった関西大学の荒武賢一朗氏をはじめ、成稿に有益なご示唆をいただいた西野範子氏、橋口亘氏、川口洋平氏、平田賢明氏に深く感謝申し上げたい。

挿図出典

fig 1:筆者作成 fig 2-①②:天草市2009 fig 2-③:河浦町2001 fig 2-④:天草市2010 fig 2-⑤:五和町1996 fig 3:本渡市1993 fig 4・5:天草市2009 fig 6:御所浦町1981を筆者トレース fig 7:筆者撮影 fig 8:河浦町1990・1992 fig 9・10:天草市2010 fig11:五和町1996 fig12-①:田中1991a fig12-②:松下1975 fig12-③:松下1975 fig12-④:神戸2000aを筆者トレース fig12-⑤:松下1975 fig13:筆者作成

参考文献

- 会田由・佐久間正訳1965「日本王国記」『大航海時代叢書11 アビラ・ヒロン 日本王国記 / ルイス・フロイス 日欧文化比較』岩波書店
- 天草市教育委員会2009『棚底城跡Ⅲ・大権寺遺跡』
- 天草市教育委員会2010『本渡城跡』
- 池崎譲二2001「博多駅・築港線第1次調査51号土抔・4号石組 ——青花・青磁」『季刊考古学』第75号 吉川弘文館
- 市村高男2010「七 中世の航路と港湾」『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』吉川弘文館
- 五和町教育委員会1996『三川城跡』
- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 愛媛県埋蔵文化財センター1983『瀬戸内海大橋関連遺跡 埋蔵文化財調査報告書Ⅲ（身近島城跡）』
- 大分市教育委員会2006『中世大友再発見フォーラムⅡ 府内のまち 宗麟の栄華』
- 大分市歴史資料館2003『平成15年度秋季（第22回）特別展 豊後府内 南蛮の彩り ～南蛮の貿易陶磁器～』
- 大阪市立美術館2002『特別展 白と黒の競演 ——中国・磁州窯系陶器の世界——』
- 大橋康二2004『海を渡った陶磁器』吉川弘文館
- 大庭康時2008「墨書陶磁器」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』海鳥社
- 小野正敏1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏1985「出土陶磁よりみた15、16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416
- 小野正敏1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏編2001『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編2008『考古学と中世史研究5 宴の中世 ——場・かわらけ・権力——』高志書院
- 鹿毛敏夫2006『戦国大名の外交と都市・流通 ——豊後大友氏と東アジア世界——』思文閣出版
- 河浦町教育委員会1990『河内浦城跡』
- 河浦町教育委員会1992『河内浦城跡Ⅱ』
- 河浦町教育委員会1993『下田城跡』
- 河浦町教育委員会2001『河内浦城跡Ⅲ』
- 川口洋平2004「中世後期の対馬・壱岐・松浦 ——土器・陶磁器からみた倭寇関連遺跡——」『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 川口洋平2009「長崎「開港」の考古学的意義」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『考古学と中世史研究7 中世はどう変わったか』高志書院
- 川内野篤2006「針尾城跡（小鯛城）の発掘調査について」『第7回北部九州中近世城郭研究会資料集』北部九州中近世城郭研究会
- 神戸輝夫2000a「鄭舜功著『日本一鑑』について（正）：「桴海図経」と「絶島新編」」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22 大分大学教育福祉科学部
- 神戸輝夫2000b「鄭舜功著『日本一鑑』について（続）：「窮河話海」」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22 大分大学教育福祉科学部
- 北野隆亮1990「15・16世紀の貿易陶磁器 ——1980年代の編年研究を中心として——」『貿易陶磁研究』No.10 日本貿易陶磁研究会
- 熊本中世史研究会編1980『八代日記』新潮社
- 倉岳町教育委員会2005『棚底城跡』
- 倉岳町教育委員会2006『棚底城跡Ⅱ』
- 御所浦町1981『天草・御所浦 ——自然と人文——』
- 佐伯弘次1996「博多出土墨書陶磁器をめぐる諸問題」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会
- 佐世保市教育委員会2005『針尾城跡 平成16年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書』

- 佐藤和夫1995『海と水軍の日本史 下巻 蒙古襲来～朝鮮出兵まで』原書房
- 柴田圭子2000「第3節 出土遺物からみた湯築城跡」『湯築城跡 道後公園埋蔵文化財調査報告書』第4分冊 愛媛県埋蔵文化財センター
- 柴田圭子2001「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価 ——中国・四国地方の遺跡を中心に——」『中世土器研究論集 ——中世土器研究会20周年記念論集——』中世土器研究会
- 高野茂1993『中世の八代 史料編』
- 高野茂2007「第二部 後期中世社会と大矢野」『上天草市史 大矢野町編2 中世 大矢野氏の活躍』上天草市史編集委員会
- 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV —陶磁器分類編』
- 田代政嗣著・堂屋敷竹次郎訳1972『新訳求麻外史』新潮社
- 田中健夫訳注1991a『海東諸国紀 ——朝鮮人の見た中世の日本と琉球——』岩波書店
- 田中健夫1991b「不知火海の渡唐船」『日本歴史』第512号 吉川弘文館
- 玉永光洋2010「豊後から見た土佐・南予」市村高男編『中世土佐の世界と一条氏』高志書院
- 鶴嶋俊彦2009「戦国相良氏の天草外交と城郭」『ひとよし歴史研究』第12号 入吉市教育委員会
- 東京大学史料編纂所編1970『大日本古文書 家分け第五 相良家文書之一』東京大学出版会
- 東南アジア考古学会・九州国立博物館誘致推進本部・鹿児島大学埋蔵文化財調査室2004『シンポジウム 陶磁器が語る交流 ——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』
- 徳永貞紹1998「肥前神崎荘・松浦荘域の中世港湾と貿易陶磁」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 中村和美1998「鹿児島県坊津と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 橋口亘1998「鹿児島県坊津町泊海岸採集の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 橋本雄・米谷均2008「第9章 倭寇論のゆくえ」桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店
- 福岡市教育委員会2004『博多87 ——博多遺跡群第124次調査の報告——』
- 本渡市教育委員会1993『浜崎遺跡 平成2～3年度本渡北土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 本渡市教育委員会1998『本渡北小学校プール遺跡調査報告書 平成7年度 本渡北小学校プール改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 増野晋次2009「大内氏関連町並遺跡の陶磁器埋納土坑について」『西国城館論集I 河瀬正利先生追悼論集』中国・四国地区城館調査検討会
- 町田利幸1991「小蘭城跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県教育委員会
- 松下見林1975『異称日本伝』第二冊 国書刊行会
- 松田毅一監訳1991『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1992『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第5巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1998『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻 同朋舎
- 蓑田田鶴男1972「六 徳の瀧の経営と近国及び海外との交渉」『八代市史』第三巻 八代市史編纂協議会
- 宮崎貴夫1996「長崎県の中世墨書資料」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会
- 宮崎貴夫1998「長崎県地域の貿易陶磁の様相 ——肥前西部・壱岐・対馬」『貿易陶磁研究』No.18 日本貿易陶磁研究会
- 森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森 毅1992「第5節 16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会
- 森 毅2000「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器の編年 ——大坂における信長・秀吉・秀頼期の陶磁器——」『織豊城郭』第7号 織豊期城郭研究会
- 森本朝子1993「ベトナムの貿易陶磁 ——日本出土のベトナム陶磁を中心に——」『上智アジア学』第11号 上智アジア学編集委員会
- 森本朝子1995「日本出土のベトナムの陶磁とその産地」『東洋陶磁』第23・24号 東洋陶磁学会
- 森本朝子2000「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」『貿易陶磁研究』No.20 日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子2002a「壱岐・対馬出土のベトナム陶磁について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 国立歴史民俗博物館

森本朝子2002b「ベトナム陶磁 ——日本における研究の成果と課題」『東洋陶磁学会三十周年記念 東洋陶磁史 ——その研究の現在——』東洋陶磁学会

横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について ——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館論集』4 九州歴史資料館

吉田寛2008「陶磁器からみた大友氏の南蛮貿易」鹿毛俊夫編『戦国大名大友氏と豊後府内』高志書院

茶北町教育委員会1994『志岐城跡』